
ピュア～比翼の鳥～

夢未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピュア〜比翼の鳥〜

【Nコード】

N8957I

【作者名】

夢未

【あらすじ】

高校の入学式で沙夜は瞳に影を宿した颯と出逢う。その瞳に惹かれた沙夜は颯のことが気になって仕方がない。一方颯も他のクラスメートは自分を避けているのに、ただ一人声を掛けてくる沙夜の存在が次第に大きくなりつつあった。

そんなある日、沙夜は友人から同級生の颯が2歳年上だと知らされる。そして何故颯が瞳に濃い影を落としているのかその訳を知り、愕然とするのだった。

プロローグ

人は過ちを犯したら、二度と元に戻ることを許されないのだろうか。

自分を愛してくれる者などこの先も現れることはないのだろうか。

レールを踏み外したという烙印を押された一人の少年の胸に、暗い影を落としてやまない思い。

だが彼に一筋の光が差し込んだ時、その光は何よりも大切な存在となった。

光のような少女もまた、彼の心に触れることに惹かれていく。

その二人の寄り添う姿は、さながら比翼の鳥、連理の枝のようだった。

(1)

四月。

桜吹雪が春の清々しい空気を薄桃色に染めている。

そんな花びら達に迎えられた新入生らがこれから三年間を過ごす私立青陵高校の門をくぐっていた。

いづみ さよ
和泉沙夜もその一人。

これからの新しい生活、これから出会うであろう友達。色々なことを考えると、不安よりも心が浮き立つ。

「私、桜って好きだなあ。日本人で良かったって実感するもん」

沙夜は傍らにいる男友達の松岡峻一まつおかしゅんいちに話しかけた。

峻一とは中学からの仲。正確に言えば中学二年で一緒のクラスになつてからの友達だ。

いつも沙夜と峻一、そして菅井萌子すがいもえこの三人でつるんでいた。

萌子とは残念ながら高校は別々になつてしまつたが、友情は変わりはないだろう。

「でもすぐに葉桜になつちまうぞ。そうしたら次は毛虫がウジャウジャと……」

「やだなあもうっ。せめて新緑の季節とか言っつてよ」

悪気がないのは分かっているから、沙夜もついつい笑ってしまう。

「俺にそんなこと言えっつて方がムリだよ」

「ごもつとも……と内心沙夜も頷いていたりする。

こんな風に思ったことを言える気兼ねのいらぬ関係が、沙夜には心地よかつた。

男女の友情は成り立たないという人がいるが、沙夜にはそうは思えない。峻一といるとあるように思えるのだ。

峻一が昇降口の横辺りを指差した。

「あそこにクラス分け貼つてあるんじゃないか？ 早く行って見ようぜ」

言つなり沙夜の空いてる手を取り駆け出した。

「そんなに急がなくても、掲示板は逃げたりしないよー！」

峻一に引つ張られながらも沙夜の心は浮き立っていた。

これから自分にどんな生活が待っているのか。

どんな出逢いが待っているのか。

きつと一番に影響を受けるのがクラスメート達なのだから、自然

と心ははやってしまう。

掲示板の前は人だかりの山だった。

「クラス一緒だといいな」

「う、うん」

(なかなか……み、見えない)

そこそこ背の高い峻一なら後ろからでも見えるのだろうか、沙夜には頭と頭の隙間からチラチラ覗くのが精一杯だった。

「もっと前行こうぜ」

それに気づいた峻一が、沙夜を引っ張り人の群れの中に入っていき、

なんとか最前列に出ることに成功した沙夜は、急いで自分の名を探し始めた。……が。

「あ、あった！ 沙夜、俺達一緒のクラスだ。やったー！！」

沙夜は峻一に先を越されてしまった。

「え、どいどい？」

「ほらあそこ。四組だよ」

四組を初めから見ていくと、確かにそこに峻一と沙夜の名が記さ

れていた。

「あ、ホントだ。うれしい！」

峻一と一緒に沙夜は心強い味方を得たような気がした。

同じ中学出身は何人がいた。

だが顔を知っている程度で話したこともないような人ばかりだったから、唯一友達といえる峻一と同じなのはとてもありがたかったのだ。

「そうと決まれば教室の方へ行こうぜ」

「そうだね」

人ごみから離れたかった沙夜は即答した。

二人は再び人だかりを分けて最後列から抜け出した。

「すごい人の数だね」

「ああ。ちょうどピーク時だったのかもな」

そう言って二人はホッと一息吐いた。

今日は新生だけで二、三年生は明日の始業式からのはず。なのに……と思うほどその時間に生徒が集中してしまったようだ。

そしてまた一人、掲示板に駆け寄る生徒がいた。

「きゃっ！」

その生徒は沙夜の左腕を突き飛ばすような勢いで人ごみの中に分け入っていった。

弾みで沙夜は後ろにいた人の背中にぶつかってしまった。

「じっ……ごめんなさい」

その背中を見上げると、男子生徒がちょっとだけ沙夜に向き直り、

「いや、別に……」

と言ってまた背中を向けた。

たったそれだけのことだった。

だが、沙夜には忘れられない一瞬となった。

男子生徒と目が合った瞬間、沙夜の周りの景色と音が一瞬にして消え、目の前にいる彼だけがそこに存在していた。

(なんて瞳をしているの。とても深い、漆黒の瞳……)

闇を湛える漆黒の双眸。

これから新しい高校生活が始まるというのに、希望などまるで感じさせない瞳。

希望などまるで否定しているかのようにも思える。

(どうしてそんな瞳をしているの？)

沙夜の心に疑問が湧きあがる。

それと同時に、その訳を知りたいとも思った。

(どうしてこんなにも知りたいと思うの？ 初対面の、まだ名前すら知らない人なのに……)

込み上げるわけの分からない感情に沙夜は戸惑った。

戸惑いつつも、沙夜の心にひとすじの思いが込み上げる。

彼の心に光を灯してあげたい、と。

「沙夜、大丈夫か？」

峻一の声に沙夜は我に返った。

「え……、あ……うん、平気だよ」

「まったく、なんてヤツだよ」

峻一は沙夜を突き飛ばした生徒に文句をたれる。もっともその生徒はすでに人ごみの中で誰かも分からないのだが。

気を取り直すように、峻一は沙夜に向き直る。

「教室に行こう」

「うん」

二人は昇降口へ向かった。

沙夜は少しだけ名残惜しそうに、チラッと漆黒の瞳の少年を振り返った。

(……またすぐ逢えるよね。同じ一年生なんだもん)

この一瞬の出逢いが順風満帆に生きてきた沙夜の生活を一変させるとは、一体誰が想像できただろうか。

(2)

教室にはすでに何人かの生徒がいた。

(ここが私達が一年間過ごす場所かあ)

足を踏み入れると、黒板には席順が貼り出されていた。もちろん最初は番号順。つまりあ行の男子が窓際の前列から……ということだ。

峻一は半分よりやや廊下側の後ろから三番目、沙夜は峻一より更に一列おいた前から二番目の席だった。

「若干男子の方が多いみたいだね」

「女子が少ないのかあ。淋しいなあ」

嘆く峻一に、沙夜は笑いが込み上げる。

「可愛い子、多いといいねえ」

沙夜の何気ない一言に俊一は苦笑した。

「分かってんのかなあ」

「えっ？」

「……何でもない」

沙夜の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

(変な松岡くん)

沙夜は首をかしげた。

「取りあえず席に荷物置こう」

峻一に言われるまま、沙夜は鞆を机に置き席に着く。

まだ周りの席は空いたまま。

(どんな人たちなのかなあ)

沙夜はキョロキョロ辺りを見回した。

何となく鼓動が速まっているのが分かっていった。

(緊張……してるのかな、やっぱり)

一番の心配は友達ができるのかな、ということだった。

女子が少ないってことも心配を増す原因なのかもしれない。

「沙夜、俺ちよっと他のクラス行ってくるな。ダチ来てるかもしれないから」

沙夜の席に来た峻一は、そう一言言い残し教室から出ていったしまった。

沙夜はフーツと息をつく。

(これからどうしよう)

話をする相手なんかまだいない。

一人残された沙夜は手持ち無沙汰に携帯電話を取りだし、萌子にメールを送った。

『松岡くんと同じクラスだったよ』

返信を待つがすぐには返ってこない。

(暇だなあ。早く松岡くん戻ってこないかなあ)

沙夜は頬杖をついた。

その時。

入ってきた男子生徒を見た沙夜の息が一瞬止まった。

(ホント!? ……同じクラスなの?)

つい先程のあの瞳の少年がそこにいたのだ。

彼は黒板の前で席を確認すると、そのまま真っ直ぐ自分の席に着いた。

(あれっ、松岡くんの前の席だ)

彼は着くなり机の上につつぶしてしまった。

しばらく沙夜は彼を見つめていた。

(やっぱりなんか他の人と違う)

研ぎ澄まされたようにピンと張りつめた空気が彼の周りにはある。

誰にも心を許していない、心を閉ざしている、一匹狼のような彼。

(他の人より大人びているからなのかな?)

姿だけなら恐らくカッコイイ部類に入る、整った精悍な顔立ち。

でも沙夜が心を惹きつけられたのは、その瞳、そしてその瞳の影。

(話がしてみたい)

沙夜は席を立った。

普段なら知らない人に自分から声をかけることはあまりしない沙夜だったが、自分でも驚くほど行動的になっていた。

「あの……」

彼はビクツと頭を起こした。傍らにいる少女に不思議な様子だ。

「あの……さっきはぶつかってごめんなさい」

「え……ああ」

一瞬分からなかった彼も、思い当たったように呟いた。

「別に気にしてないから」

日常どこにでもある出来事なのだから、気にすることはなかっただろう。

ただ沙夜は話すきっかけが欲しかった。

「一緒のクラスだったんだね。私、和泉沙夜。あなたは？」

「俺は本多颯ほんたそつ」

話しかけてくる沙夜を不思議そうに見た彼は、僅かに視線を外すと一言呟いた。

「本多くん、私あなたと友達になりたいな」

瞬間驚いたように颯は沙夜を見た。

「友達……？」

「うん。ほらっ、クラスメイトになったのも何かの縁だろうし」

無邪気に話しかけてくる沙夜に、颯はどう対応したらいいのか分からずにいた。

ただ友達という言葉を噛み締める。

「友達か……」

呟いた一言が沙夜の胸をうった。

(友達って言葉をこんなに大切そうに言う人、今まで誰もいなかったよ)

沙夜は颯に孤独な心を見た。

「じゃ、今日から友達ね。これからヨロシク！」

沙夜は颯に握手を求めた。戸惑いつつも、颯も沙夜の手を取った。

「よろしく」

沙夜はついついジッと颯の顔を見つめてしまった。

「何か？」

見つめられ困った颯が耐えきれずに尋ねた。

「うんとね、本多くんがちょっと羨ましいなあって思ったの」

「俺が？ どうして？」

「大人っぽくていいなあって。私なんて今だ中学生にしか見えないもん。下手すると小学生だって言われることもあるんだよ。本多くん、上級生って言われても納得できるくらい落ち着いてるし。私も大人っぽくなりたい」

それは童顔で背も低い沙夜の悩みでもあった。

大人っぽく見られたくてメイクしたこともある。でもしなれていないせいもあって違和感が漂うだけだった。

「変に大人ぶらない方がいいよ」

颯の瞳にほんの僅かだが優しさが灯った気がした。

「年相応が一番かもしれないけど、ムリに大人っぽくしようとしな
い方がいいよ。和泉さんには和泉さんが持つ魅力だってあるんだろ
うし。やっぱり自分らしさがないとね。それに俺は大人っぽいんじ
ゃない。俺は本当は……」

颯は言いかけて俯いた。

その様子に、沙夜はこれ以上彼に話をさせてはいけないような気がした。

深い瞳の理由に触れることなのかもしれない……と。

知りたいが、今はまだ聞いてはいけないのだと直感で思った。

「ありがとう、励ましてくれて」

顔を上げた颯に、沙夜は微笑んだ。

そこへ沙夜の携帯の着メロが突然鳴り出した。萌子からの返信だ。

「また後でね」

机の上に置きっぱなしになっていた携帯を、沙夜は慌てて取りに戻る。

『いいなあ。私の方も部活の友達と一緒にだったよ〜ん』

(萌ちゃんもうまくやってるんだ)

笑みが込み上げてきた。

その後、沙夜は颯と話す機会がなかった。

……というのは席に戻るとすでに周りの席が埋まりつつあり、後ろの席の子に声をかけられ、話しこんでいるうちに先生が来てしまった、というわけだ。

実は何度か颯が沙夜に視線を向けていたとは、沙夜は知るよしもなかった。

*

*

*

入学式から早くも三日が過ぎようとしている。

今日は高校最初の実力テストがあった。……が、沙夜の出来を言うのはあえて避けておこう。

たった三日。それで高校生活に慣れたわけではないが、クラスの雰囲気というかクラスの輪はまとまりつつあった。

ただ一人を除いては。

沙夜はその人のことを思うだけで重苦しく、胸が潰れるような気分になる。

何もしてあげられない。してあげられないから苦しい思いをするはめになる。

悪循環と分かってはいても、自分ではどうすることもできないでいた。

(本多くん……)

沙夜はチラッと、鞆に用具をしまっている彼を見た。

入学早々、彼は一人きりだった。

この高校に知り合いの人もいないらしい。

クラスの人達は、彼のことを近寄りがたいと言って自分から話しかけることもない。

沙夜も言われてみればそう思える所はあった。

入学式の後、クラスで自己紹介をした時のこと。

たいていの人は名前はもちろん、出身中学とか趣味とか入ろうとしている部活とか好きな芸能人とか、だいたい二、三個は言ったのだが、颯は一言、

「本多颯です」

と言ったきり座ってしまったのだ。

一瞬クラスがシーンと静まり返り、先生も戸惑っていた。

次の峻一の持ち前の明るさでなんとか元のムードには戻ったが、それきり自分から颯に話しかける人は皆無となった。

ただ沙夜は時々声をかけていた。とはいっても挨拶程度だが。

沙夜には颯を避けることができなかった。

戸惑いはあった。だが近寄りたいたか怖そうだとか人に言われるまで思いもしなかった。

教室でも一人。休み時間も窓際の教室の隅で一人外を眺めている。そんな颯を、時折沙夜は見ていた。

(ただ一人でいるのが好きなのかな……。それとも人付き合いが苦手なだけとか)

「沙夜、帰る前にちょっと一緒に来てくれないか」

見ると峻一がすぐ隣に立っていた。

沙夜の心はホッと和む。

沙夜にとって峻一は心安らぐ存在だった。

沙夜がどんなバカな失敗をしてもちゃんとフォローしてくれる。

(松岡くんてミントキャンディーみたい)

今も重苦しい気分がスーッと穏かな気分になった。

そう、颯への思いとは正反対。

「いいよ。急用もないし」

峻一の意図に気づかない沙夜は軽い気持ちで返事をする、峻一と肩を並べて教室を出ていった。

そして着いた場所は屋上だった。

「沙夜、俺ずっとお前に言いたいことがあったんだ」

峻一のそのいつもと違う真面目な顔に、沙夜は彼から目を逸らした。

時折春の強い風が吹きつける。

日差しは暖かいが、風が強いせいか肌寒く感じる。

沙夜は峻一にどう対応したらいいのか分からなかった。

(松岡くん、なんか変だよ。いつもと違って安心できないよ)

「松岡……くん」

名前しか呼べない。他に口に出す言葉が見つからない。

言葉が何も浮かんでこなかった。

「沙夜、俺と付き合っただけいいんだ」

驚いた沙夜は反射的に峻一を見つめた。

(つき……あつ?)

「中二の時、同じクラスになってからずっと好きだったんだ。本当は中学卒業する時に言おうか迷ってた。でも同じ高校に行けるって分かったから、入学したら言おうって心に決めてたんだ」

沙夜は初めて見る峻一の真剣な表情、そして思いがけない告白に俯くしかなかった。

「じよ…冗談でしょ?」

「冗談なもんか。お前のこと、マジで好きなんだ。今だから言っけど、お前があの本多に話しかけてるの見て妬いてたんだぜ」

「だって私、松岡くんのこと友達だと……」

仲のいい男友達。

(本当にそれだけ?)

沙夜にとって峻一は心を軽くして温かくしてくれる頼もしい存在。

だがそれが恋愛感情と結びつくのかどうか、沙夜には分からなかった。

「友達からでもいいんだ。いつか沙夜が俺のこと見てくれるまで待つから。……それとも他に好きなヤツ、いるのか？」

沙夜の脳裏に反射的に颯の顔が浮かんだ。

(まさか、本多くんのこと……?)

沙夜は思い浮かんだ自分に驚いた。

(まさか……よね)

「言っとくけど本多だけはやめとけよ。クラスの評判良くないし」

沙夜の心を察してか、峻一はくぎをさすように言った。

「クラスの評判良くなかったって避けるなんてできないよ。本多くんは友達なんだもん。私から友達になろうって言ったんだもん」

颯のことを少しでも知りたかった。あの瞳に少しでも光を灯したいと思ったから。

「ばっかっ！」

峻一は沙夜に急に怒鳴りつけた。

「そんなこと言ってたら、今にお前に友達がなくなるぜ。男同士のケンカなら殴り合いで済むけど、女子だと陰口とか言われるのがオ

手だ。お前、クラス中から後ろ指さされながら生活していけるか？俺は嫌だぜ。そうなると分かって放っておけるもんか！」

沙夜は自分を見つめる熱い眼差しに、峻一の真剣さを思い知った。

心配してくれる心は本当に嬉しく感じた。

沙夜にも仲間外れにされる怖さがないわけではない。しかしこのまま颯との関係を断ち切ってしまったら、沙夜は一生後悔するのではないかと思っただ。

あの日あの時、瞳の中に引き込まれて以来、沙夜は自分の中の何かが徐々に変化しつつあるような気がしていた。

(それが何なのか、分からないまま終わらせるなんてできないよ)

「松岡くん、私に考える時間をちょうだい。松岡くんへの返事も本多くんのこと、どうするのが一番いいのか答えが出せるまで。だって私、まだ好きってどういふことなのか、どういふ気持ちを言うのか分からないの。その相手はもしかしたら松岡くんかもしれないし、本多くんかもしれない。もっと違う第三者かも……」

しれない、と言おうとした時。

(あっ………！)

沙夜は峻一の腕の中にいた。

沙夜は信じられなかった。

峻一が自分を抱きしめていることが。

沙夜の体全体がドキドキと脈を打っていた。

「やだっ…離して」

呟く声も震えていた。

「……お願い、離して」

俊一の腕は逆に力がこもる。

（松岡くん…！）

沙夜の鼓動はますます高鳴る。

馬鹿なことだが、沙夜はこの時初めて峻一を男子ではなく男性として意識したのだ。

（もう心臓が壊れちゃいそうだよ！）

「お前が本多のこと言うたびに、段々とお前が離れていく気がして、俺気が気じゃないんだ。……急にこんなことしてゴメン。待つつて言っておきながら反則だよな。でも抑えきれなくて。俺の気持ち半端じゃないって分かって欲しいんだ」

少し腕の力が弱まった。

「ごめんなさい…」

沙夜は無我夢中で峻一を突き飛ばすようにして走り出した。

心の動揺は隠せない。

沙夜は自分がどこを走っているのか、足元がひどく不安定に感じている。
ていた。

(松岡くんがあんなことするなんて)

頭の中に抱き締められたシーンがフラッシュバックするとともに、
感触までもが蘇ってくる。

初めてだった。

初めて沙夜は峻一を怖いと思った。

「きゃっー！」

階段を駆け下りる途中誰かの体にぶつかり、沙夜は階段を踏み外してしまった。

(落ちるー!)

沙夜は思わず目を閉じた。

鞆が派手な音を立て転がり落ちる。

(痛く……な……い?)

沙夜が恐る恐る目を開けると、ぶつかった人の腕に支えられてい

た。

「あ、ありがとう」

沙夜は自分の足できちんと立つと、その誰かを見上げて息を飲んだ。

「本多くん！」

不思議なことだった。

今まで颯には重苦しい思いを、峻一には安心感を抱いてきたが、この瞬間はまったくの逆だったのだ。

颯の顔を見た瞬間、張りつめていた糸が弛むようにホッと安心したのだ。

沙夜はこのまま頼ってしまいたくなくて、無意識のうちに颯の片腕をすがりつくように握っていた。

「和泉……?」

颯は目を見開いて沙夜を見下ろした。沙夜の突然の行動に驚いたらしい。

「本多くん、本多くん……」

颯は少し困ったように、だがその瞳に僅かな優しさを灯して、腕を掴んでいた沙夜の手に触れた。

「何かあったのか？」

だがそのほんの少しの優しさで、沙夜の心は落ち着きを取り戻していた。

「……ごめんね。何でもないの」

そう言いながら沙夜はそっと腕から手を離した。

「助けてくれてありがとう。……バイバイ」

これ以上颯を困らせまいと、沙夜は微笑んで彼に背を向けた。

「和泉！」

颯が沙夜の肩を掴んで突然引き止めた。

沙夜が驚いて肩越しに振り返ると、颯が心配そうな顔つきで沙夜を見つめていた。

「本当に大丈夫なのか？」

沙夜の胸がキュン…と締めつけられた。

沙夜は、些細な言葉だが自分を本当に気遣ってくれているのだと感じて嬉しかった。

「うん、平気。ありがとうね」

今度は颯に笑顔を向けて言うと、沙夜は歩いて階段を降りて鞆を

拾った。

(この気持ち、何だろう)

嬉しいような苦しいような、それでいて愛おしい複雑な想い。

沙夜は予感した。

これから物語が始まるという確かな予感が……。

*

*

*

日曜日。

沙夜は萌子の家を訪れた。

「沙夜、高校どう？」

萌子が紅茶を一口飲み、ティーカップを持ったまま尋ねた。

「どつっ……て楽しいよ。新しい友達もできたし、それに……」

沙夜はふと颯のことを思い出した。

(私、何を言うつもりだったんだろう)

「……何でもない。萌ちゃんの方は？」

沙夜はごまかすように萌子に言った。

「まあ交通の便もいいし、同じ中学の子もいるし、友達もできたし。それにけっこうカッコイイ男の子が多くて、それなりの毎日ってカ
ンジかなあ」

「そっかあ。萌ちゃん、自転車で二十分で行けちゃうもんね、いい
なあ」

少し会話が途切れる。

萌子は紅茶を飲み干し、ティーカップを下に置いた。

「それよりさ、いきなりメールで会いたって何かあったの？ も
しかしてもうホームシックっていうか中学時代が懐かしくなったと
か？」

沙夜は中身のたくさん入ったティーカップを手に持ったまま萌子
を見つめた。

「図星？」

からかうような笑みを浮かべて言った萌子に、沙夜は首を横に振
ってティーカップを下に置いた。

「……ちょっと違うと思う」

沙夜が言い出しすらそうにしていると、萌子は少し呆れたように
ふっと息をつく。

「言っちゃいなよ。何かあったな……てのはメールでピンときてるん
だから」

そう言ってウィンクした萌子を見て、沙夜ははにかむように笑った。

中学時代から何度となく何かあることに相談しているのだから、態度ですぐ見破られていたのだ。

沙夜は覚悟を決めて口を開く。

「私ね、……松岡くんに告白されちゃった」

沙夜は恥ずかしそうに俯いて呟いた。

告白されたのが初めてなら、それを人に言うのも初めてだったからだ。

「それで、何て返事したの？」

淡泊な反応に沙夜は拍子抜けになる。

「驚か…ないの？」

呆れたように溜息をつく萌子。

「峻一の気持ちくらい、とっくに知ってたよ。やっと言ったのか…
と思ってるね。それで返事は？ OKしたんじゃないの？」

「……………逃げてきちゃったの」

ボソッと答える沙夜。

「あなた、それ相手にムチャクチャ失礼だよ」

沙夜は何も言い返せなかった。

心の中で、ごもつとも…とうなだれる。

きつと一大決心をして告白してくれただろうに、逃げ出すなんて峻一に申し訳ないことをしたと思っていた。

あの日以来、二人とも今まで通りに振る舞おうとはしているのだが、どこかぎこちなくなってしまうていた。

もう前のような友達には戻れないのかもしれない。それが沙夜には寂しかった。

「ねえ沙夜、峻一に告白されて嫌だったの？ 私、沙夜と峻一けっこうお似合いなんじゃないかって思ってたんだけど」

萌子は、落ち込む沙夜を諭すように言った。

「嫌なんかじゃないよ。びっくりはしたけど」

「じゃあ……」

「ずっと友達だと思ってたの。急に恋愛対象に見ようとしても、心が追いつかないよ」

いつも肩を並べて立っていた。くだらない冗談を言って笑い合える同士のよう存在だった。

男の人と意識したのはたった一度だけ。

あの抱き締められた時だけ。

「友達から始める恋愛だってあるんだよ。峻一のこと嫌じゃないなら、一步踏み出してもいいんじゃないかな。あいつがいいヤツだったこと、沙夜だって分かってるでしょう?」

萌子は沙夜と峻一が付き合うのは賛成だった。

沙夜も峻一となら楽しい恋愛ができるかもしれないと思った。

学校帰りにどこか寄り道したり、休日にはデートをする、ごく普通の男女交際。

それが自分には合っていると思う。

しかし恋愛について思うと、沙夜の心にもう一人の人物が浮かぶのを、沙夜は無視できなかった。

「松岡くんはいいヤツだよ。でもね、私の心にもう一人男の子……うっん、男の人がいるの」

意外な言葉に萌子は目を丸くする。

「沙夜好きな人いるんだ!？」

「分からない。まだその人に対する感情が何なのか……。でもその人のこと知りたいと思うし、近づきたいとも思うの」

「そのこと峻一に言った？」

「ううん。でも気がついてるみたい。私が気になってること」

「そっか。それならまだ付き合ったりしない方がいいね。峻一なら沙夜の心がきちんと整理つくまで待っててくれるよ」

「そう……だね」

あの時は峻一もどうかしてただけなのだから……と沙夜も思っていた。

あれ以来峻一は後悔したのか、沙夜に触れるのを躊躇っている。

また怖がらせてしまうのではないかと恐れているのだ。

沙夜はふうつと安堵の溜息をついた。

「萌ちゃんに相談して良かった」

(3)

日々日差しが暑さを増してくる。

入学から一か月以上が過ぎていた。

沙夜と峻一、そして沙夜と颯の関係は何の進展もないままである。

そんなある日の夕方、学校帰りに峻一は沙夜を地元のファミレスへ連れていった。

返事を聞かせてくれという話だったらどうしようかと沙夜は困った。

もう一か月待たせているのだから早く返事をしなくては………という思いはある。

だがまだはつきり自分の心が分かってはいない。

沙夜はもう逃げることでだけはしてはいけないと肝に銘じる。

注文を済ませると、峻一は水を飲んで喉を湿らせた。

「迷ったけど、やっぱりお前には言っとかなきゃと思ってた」

「何を？」

「本多のこと」

予想外の話題で、しかも颯の名が出たものだから、沙夜は動揺した。

「本…多くんがどうかしたの？」

沙夜の様子に峻一は淋しさを感じつつも、これだけは伝えなくては…と強く感じた。

「沙夜が本多のこと気になってるのは分かってる。だからこそ伝えなくちゃいけないことなんだ。取り返しがつかなくなる前に。ただこれだけは分かってくれ。俺の方に振り向いて欲しいから言っんじやないってことだけは」

峻一のあまりに真剣な顔に、沙夜はゴクリ…と喉を鳴らした。

(何を言っつもりなの……?)

ただ良くない話であることなのは感じ取っていた。

だから不安になる。

「沙夜は本多が俺達より二歳上だって知ってるか？」

「……………えっ？」

沙夜は耳を疑った。

沙夜の硬直した様子を見て峻一は付け加える。

「本多は今年十八歳。高校を二年遅れて受験したらしい。別の高校

を退学して入り直したわけでもない。どうしてだと思っ？」

沙夜の頭の中は混乱した。

帰国子女ではないか、とか。

青陵に合格するのに三年かかった、とか。

まずそれはないとすぐ否定する。

青陵は名門でもなければ有名な進学校でもない。程度は県でも中間レベルの高校だ。

「どうしてなの？」

知りたいが、沙夜はその答えを恐れていた。

峻一はしばらく言うのを躊躇った。

その間に注文したアイスコーヒーとアイスティーが運ばれてくる。

躊躇ったのは、知った後の沙夜の様子が気がりだったからだ。

でもいずれ沙夜も知るのだから、まだショックの少ない今のうちに告げるべきだと躊躇いを絶ち切る。

「本多が二年遅れたのは、……………少年院に入っていたからだよ」

（少年……………院？）

沙夜は「うそだ」と叫びそうになった。

颯が犯罪を犯したなんて信じられなかった。

「信じ……ない、そんなの。誰が言ったの、そんなこと！」

峻一は動揺する沙夜をこれ以上追い詰めたくはなかったが、すべてを話すことが沙夜のためだと更に口を開く。

「中学の時の部活の先輩が青陵の三年生にいるんだけど、その先輩の友達が本多と同じ小中学校だったんだって。その人から聞いたんだ。本多の中学からだあまり青陵を受ける人はいないらしいよ。過去を知る人がほとんどいないから青陵に入ったんじゃないのかな。中学時代、かなりの不良だったそうだ。補導なんて当たり前」

「何やって少年院に……」

沙夜は震える両手をグツと握った。

「具体的にはその人も知らないらしいよ。でも何の罪を犯したってあいつならやりかねないと思わせるくらいの人物だったそうだよ、本多は」

それでもまだ沙夜には信じられなかった。

そんな沙夜の脳裏に、入学式で本多が言ったことが浮かぶ。

「俺は大人っぽいんじゃない。俺は本当は……」

(二つ年上なんだって言おうとしたの?)

沙夜は出逢った瞬間の本多の姿を思い出す。

(漆黒の双眸にある深い闇は、過去の罪への報いなの?)

真実を知りたかった。

間違いであって欲しいと願わずにはいらなかった。

「私、明日本多くんに確かめてみる」

「そんなことしない方がいい。何されるか……」

沙夜は首を横に振った。

「今の本多くんは何もしないよ、……絶対に」

その一言に、峻一は目を見張る。

(……もう遅かったみたいだな)

沙夜の自分でさえまだ気づいていない颯への想いの強さを知り、
峻一は心が痛んだ。

ただ願う。

少しでも傷が小さく済むように……と。

*

*

*

「本多くん、……聞きたいこと、あるの」

放課後、沙夜は彼が教室で一人になるのを待って声をかけた。

彼はいつも下校するのは夕方遅く。

部活をしているわけではないが、教室や図書室で時間を潰している。

沙夜はそれを知っていた。

「何？」

予習をする手を止め、颯は傍に立つ沙夜へと視線を上げた。

(本当に彼が少年院にいたの……?)

沙夜は颯から視線を外す。

「和泉？」

いつもと様子の違う沙夜に気づいた颯は、席から立ち上がるが、どうしたらいいのか持て余すばかり。

「どうかしたのか？」

沙夜は目を閉じ、深く一呼吸すると颯を見つめた。

「私、聞いたの。本多くんが……」

一瞬言葉が詰まる。真実を知るのが怖かった。

「俺が…？」

「本多くんが…少年院にいたって。本当なの？ 嘘…だよな？」

沙夜の言葉はまるですがるような言い方だった。

しかし沙夜は目にしてしまった。

少年院と聞いたとたん、颯の表情が凍りつくのを。

「嘘…なんでしょ？ ねえ本多くん、嘘だって言ってる！」

沙夜は颯の両の腕を掴んで問いつめる。

颯は唇を噛み締め沙夜から顔を逸らした。

「…それとも本当のことなの？ 私、真実が知りたいの。過去に
一体何があったの？ お願い、教えて！」

颯は沙夜の手をどけ、背を向ける。

聞こえてきたのは感情を押し殺した低い声。

「本当のことだ。十五歳の時、少年院に入った」

「何…して？」

沙夜は震える声でそれだけ言うのが精一杯だった。

颯が沙夜に向き直る。

「色々やった。喧嘩や恐喝なんて日常茶飯事だった。気を紛らわせるのに愛してもいない仲間の女を抱いたこともある」

沙夜は信じられない思いで颯を凝視した。

颯が沙夜の頬に触れようをそつと手を伸ばす。

ビクツと沙夜は肩をすばめた。

「俺が怖いか？」

「当たり前だな……」とでも言うように颯は言った。

(本多くんのこと、……怖いのか?)

沙夜は怖いというよりも、まだ現実を受け入れられずにいるのだ
った。

沙夜はさすがのように颯を見上げる。

「私は本多くんと、友達でいたい」

今度は颯が驚く番だった。

自分の過去を告げてなお、この自分を真っ直ぐ見つめてくる者など今まで誰一人存在しなかった。

嬉しくもあり、彼女の存在をこの上なく愛しく感じた。

そしてまだこの自分にも人を愛する心が残っていたことに驚いた。同時に、汚れきった自分の傍にこれ以上彼女を置いておくわけにはいけないと思った。

「まだそんなこと言うのか。ならば四年前の十月十八日の新聞を調べてみるんだ。それを見ればもう俺と友達でいたいとは思わないはずだ」

それだけ言うと、突き放すように颯は荷物を片付けて教室を出ていった。

最後にたった一言、

「さよなら」

と言い残して。

*

*

*

次の日の放課後。

沙夜は県立の図書館へ足を運んでいた。

颯の言った記事を確認するために。

パソコンの画面を食い入るように見つめ、過去の記事と向かい合う。一つの内容も見落とすまいと慎重に。

沙夜の喉は緊張感から渴いていた。

新聞に載るほどの事件なのだから、よほどのことなのだろうと覚悟はしている。

知ってしまうことの恐怖心がないといえは嘘になる。

知ってしまったら颯への態度も気持ちも変わってしまうのではないかと。

でもそれ以上に本当のことが知りたいとも思っていた。

瞳に宿る闇の正体を知りたい、と。

「沙夜っ」

ポンツと肩を叩かれ、沙夜はビククリして振り返る。

そこには神妙な顔つきで峻一が立っていた。

「本当にここに来てたんだな。で、見つかったか？」

沙夜は無言で首を横に振った。

沙夜は峻一に今日図書館へ来ることを教えていた。

昨日の夜峻一から携帯電話に電話が入り、颯に真相を聞いたのか尋ねられた。

沙夜は颯が少年院にいたと言ったことを伝えた。

そして新聞を調べるよう言い残したことも。

峻一は一度は止めた。

少年院にいたことが事実である以上、もう沙夜を颯に関わらせたくはなかった。

自分のほうに振り向いて欲しいからではない。これ以上関わって、沙夜の純粋な心に傷がついてしまわないか、彼女が危ない目に合ったりするのではないかと心配だったのだ。

でも沙夜は峻一に言った。

「真実から目を背けたりしたくない。そんなことをしたら本多くんと本当の友達になれないから」と。

峻一はそれ以上止めることはできなかった。

ただ心に決める。

どんな結果が待っているようと、沙夜を守っていることと。

「じ……れ……」

その時、ふと沙夜が放心状態のような眩きを漏らした。

沙夜の眩きを聞いて、峻一もパソコンの画面を見つめる。

「うそ……だろ」

一瞬見間違いかと思った。

そうであってほしかった。

『グループのリーダー殺害か』

太字で書かれた見出しに息が詰まる。

「人を…殺した……の？」

信じられない眩きが思わず口をついて零れる。

颯の名前が出ているわけではない。未成年だから名前はふせられている。

だが他のどこを探しても、十月十八日で颯の関わっていきそうな事件は載っていないかった。

記事の内容は、グループの一人が八階建てのビルの屋上からリーダーを突き落とし殺害したらしいこと、目撃者が同じ不良グループ内にいたこと、犯人はその場で捕まったことが主に書かれていた。

沙夜はその部分を印刷し、何度も何度も読み返した。

動揺を隠しきれない沙夜を見かねて、峻一は沙夜を支えるようにして図書館を後にし、家まで送っていった。

「沙夜、大丈夫か？」

門のところまで来て、今だ平常心を取り戻せないでいる沙夜を氣遣う峻一。

「私…信じたくない。本多くんが人を殺したなんて……。新聞に載ってること、全部真実ってわけじゃないよね？」

すぎる思いで見つめてくる沙夜の頭に峻一は優しく手を置いた。

「忘れた方がいい。本多のこと、ゆつくりでいいから忘れるんだ。彼はただのクラスメート、そう思うんだ。いいな？」

沙夜は肯定も否定もできなかった。

颯の罪が信じられない。

颯を嫌いにはなれない。

しかし事実が明らかになった今、峻一の心配する気持ちもよく分かる。

(でも……。でもあの出会いも何もかもなかったことにしたくないよ)

「わ…、私は……」

言葉が何も浮かばない。

代わりに颯との出会いから昨日のことまで、色々なことが頭の中を駆け巡っていた。

胸が潰れそうだった。

切なかった。

「私は……」

沙夜の瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「沙……夜？」

戸惑う峻一をよそに、沙夜は溢れ出る想いが何なのかようやく気づいた。

「松岡くん、ごめんね」

「何急に謝って……」

「私、やっと気がついたの。誰が好きなのか」

峻一は一瞬驚いたが、沙夜の心を知ってか、寂しそうな瞳で沙夜を見つめた。

「本多だろ。分かってたよ」

思いもよらない峻一の言葉に、沙夜は目を丸くする。

「ホント、沙夜は鈍感だよな」

少し笑いを含んだ言葉に、沙夜の心はわずかに軽くなった。

「じめんね」

「いいさ、人の心はどうしようもないもんね。でも本多のこと、あれが事実なんだ。これ以上傷つく前に、その思い忘れてしまった方がいい。同じクラスで毎日顔合わせなきゃいけないから難しいだろうけど、ゆっくりでいいから……な」

(忘れなきゃいけないのかな……)

この胸に熱く込み上げる想いを捨てたくないと思った。

颯のことをただの知人としてかたづけたくはなかった。

自分の想いに気づいた今、気づく前より一層そう感じていた。

「忘れたく……ない」

「沙夜!？」

沙夜は真っ直ぐ峻一を見上げた。

「傷つくかもしれない。苦しむかもしれない。それでもいい。忘れたくないの、捨てたくないの。自分の気持ち、大切にしたいの!」

沙夜の真剣な眼差しに、峻一は反論できなかった。

初めて見る沙夜の表情に、その内に秘めた頑なな心を感じ取っていた。

今まで沙夜はどちらかといえば、萌子の影に隠れているような内気で弱い少女だった。

だが今日の前にいるのは、一途な心を持つ、真っ直ぐな瞳をした少女。そこにか弱いイメージはなかった。

「そこまで沙夜が言うならもう止めない。俺にできることがあったら協力するよ。ただ危険な目に合いそうになったら逃げるんだぞ。自分のこと、まず大切にしろよ」

沙夜はコクリと頷いた。

「心配かけてごめんね」

「謝るなよ。ほら、もう家ん中入りな」

峻一の穏かな笑顔が沙夜を和ませる。

「うん。じゃ…バイバイ」

「またな」

そうして沙夜は峻一と別れ、家の中に入っていった。

その夜。

沙夜はベットの中でなかなか眠れずにいた。

落ち着いたら知りたいことが浮かび、気がかりだったのだ。

(本多くんが人を殺めたのが本当だとしても、その訳が知りたい)
カッとしたからとかムシクシヤしたからとかいう理由で人を殺すような人ではないはずだと思った。

それに彼は十五歳の時、少年院に入ったと言った。

事件が起こった時、彼はまだ中学二年だった。

(少年院に入るまでそんなに時間がかかるものなの？ 確かに日本の裁判は長いけど……。それともこの事件が直接の原因じゃ……。ない？)

そんなことがありえるのだろうか、と疑問に思う。

沙夜は確かめようと思った。

人目につくところのできる話の内容ではない。

明日は休み。

颯の家まで行こうと決め、沙夜は部屋の灯りを消し目を閉じた。

(4)

沙夜は休みだというのに、朝早く家を出た。

鞆にはパソコンで調べた地図のコピーと颯の住所を書いた手帳が入っている。

颯の家は県の中心市の郊外らしい。

学校までバスと電車を乗り継いで通っている。

来てみて、沙夜は改めて知る。

颯がなぜ沙夜の倍の時間がかかる青陵高校のような家から遠い学校を選んだのか。

誰も過去を知る人のいないようなところを選んで、やりなおすつもりだったのだと。

でなければ近くの、学校も多い県の中心市を通り越して、わざわざ県の端の市にあるような学校へは入学しなかっただろう。

沙夜は地図を見ながら、本多の表札を探す。

思ったよりあっけなく颯の家は見つかった。というより周りの家よりワンランク大きかったから見つけやすかったのだ。

(もしかして本多くんちって、お金持ち?)

なのになぜ非行に走ったのか、沙夜には理解しがたかった。

とにかく門で立っていても仕方ないので、インターホンを鳴らす。

(いなかったらどうしよう)

少し不安がよぎる。

午後だとその可能性が高いと思い、午前中に来たわけだが。

なかなか返事がない。

(留守なのかなあ)

もう一度鳴らしてみても返答がなければ諦めようと、インターホんに指を近づけた時。

「和泉か？ どうしてうちに？」

突然聞こえてきた声に沙夜はビックリした。

「なんで私って分かったの？ ……あ、カメラ付きのインターホンなんだ」

思わず自問自答してしまう。

「ちょっと待ってて」

インターホンの切れる音がして一、二分後、玄関を開けて颯がでてきた。

初めて見る私服姿に鼓動が一瞬高まる。

「何か用？」

颯は見当がついているかのように聞いてきた。

「聞きたいことがあるの。学校とかじゃ人がいて話せないと思って家まで来ちゃった」

「家に入るか？ 今、俺以外誰もいなくて、それでもよければだ
ど」

誰もいないのは好都合だが、二人きりで家の中という状況に沙夜は戸惑った。

昔、愛してもいない女の人を抱いたことがあると言った颯の言葉を思い出した。

(昔はそうでも、今は違うよね)

「いいよ。二人きりで話がしたくてここまで来たんだもん」

恐れず見つめてくる沙夜に、颯の心は彼女に惹かれずにはいられなかった。

そんな心を悟られまいと冷静を装う。

「じゃあどござ」

颯の後ろについて門をくぐり、家の中へ入っていく。

「本多くんちって立派なんだね。私、ビックリしちゃった」

キヨロキヨロ家の中を見渡しながら沙夜が言った。

「資産家だったらしいよ。まあ義父親が医者ってこともあるのかも
しれないけどね」

「今日お父さんは？」

「昨日から宿直でまだ病院」

「お母さんは？」

颯は一瞬黙り込んだ。が、何事もなかったように再び口を開く。

「いない。義父さんと二人暮らしなんだ」

その答えに、沙夜は聞いてはまずいことを聞いてしまったのかも
……と思った。

(お母さん、亡くなったのかな。それとも離婚したとか)

その後はリビングに着くまで二人とも無言だった。

颯は沙夜をソファに座らせると、

「何か飲むか？ お茶かコーヒーくらいしかないけど」
と言って部屋を出ていこうとした。

「待つて！ 何もいらぬから本多くんも座つて」

これから話をする内容を考えると、とても悠長に何か飲んではいられないと思つたのだ。

沙夜の思いを察してか、颯はそれ以上は何も聞かず言われた通りソファ―に座つた。

「私調べたよ、新聞」

そう言つて沙夜は鞆から一枚の紙を取り出した。何度も読み返してシワだらけになつた用紙を。

「この記事で合つてる？」

沙夜は広げて颯の向きに合わせてテーブルの上に置いた。

覚悟していたのか、颯の表情に変化はなかつた。

「合つてる。……これで分かつたら？ 俺がどんな男なのか。それなのに今さら何を聞きたいんだ？」

自分を殺人者と認める颯を前にしても、沙夜は彼に対して恐怖心を抱かなかつた。

「理由を知りたいの。どんな理由があろうと、人を殺してしまうことはいけないことだつて分かつてる。でも本多くんが軽はずみなことで殺人を犯すなんて考えられないの。正当防衛つてこともあるし……」

颯は、まだ自分を信じようとしている沙夜の思いを嬉しく感じていた。

記事に書いてあることだけを鵜呑みにせず、こうして自分と向かい合って訳を知りたいと言ってくる沙夜の存在は、颯の心の扉を押し開いていった。

彼女にはすべてを話してしまってもかまわない。

それで彼女が自分から離れていってしまったっても彼女を恨んだりはない。

颯はそう思った。

「和泉は俺のうち、裕福だと思っただろ？」

「……うん」

「経済的にはそうでも、家庭内は崩壊してるんだ。俺は母の連れ子で、俺が六歳の時本多の義父と再婚したんだ。でも母は三年後、俺を残して蒸発してしまった。義父も翌年の頃から新しい女と付き合い始めたんだ。それが誰だと思う？」

突然過去を話し始めた颯の話に聞き入っていた沙夜はいきなり質問されて言葉に詰まった。

（お医者さんなら普通……）

「か…看護師さん、とか」

それだつたらまだ良かったといった感じで颯は首を振った。

「当時の俺の担任教師。付き合いがバシてからは当たり前前だけど、世間の風当たりが厳しくなったよ。母は蒸発、義父は夫ある教師、しかも息子の担任と不倫……だもんな。発覚後も何年かは関係が続いていたし。教師は退職したけど、俺にとって学校は針のむしろだった。家にも学校にも居場所がなかった俺は非行に走った。毎日の気まま暮らしが俺にとっては救いだった。義父も教師も俺を恐れて近づこうとはしなくなっていた。そうこうしているうちに月日は流れて、この事件が起こったんだ」

* * *

十月十七日夕方。

とあるビルの屋上。

この廃屋ビルは颯のいるグループがよく使っていた。

この日は颯の見た限りで、まだ自分とリーダーの宮城洋介みやぎやんすけしかいなかった。

洋介に声をかけようとした颯は、一瞬我が目を疑った。

颯が目にしたのは注射器を手にした洋介の姿だったのだ。

それだけではない。彼の足元には違法な錠剤を飲んだ残骸がいくつも残っていた。

「宮城さん、何してるんだよ！」

颯は駆け寄って注射器を取り上げようとした。

洋介は颯にとって兄貴同然だった。

洋介も特に颯をかわいがって、いずれはリーダーを彼に継がせようと思えていた。うとさえ考えているくらいだった。

「離せよっ！」

洋介は颯を突き飛ばす。

「宮城さん！」

洋介はユラリと立ち上がった。

「俺は破滅したんだ。もう生きてちゃいけないんだ」

ヨロヨロとフェンスに近づきそれを乗り越えようとする洋介を、颯は必死に止める。

「いやだ、行かせないっ！ 何があつたか分からないけど、死んだらなんにもならないじゃないか！」

ドラッグで正常でないはずの洋介が肩越しに颯を振り返った時、真顔で微笑んだ。

「お前は俺みたいになるなよ」

力で上回る洋介は再び颯を突き飛ばした。

颯が起き上がると同時に、洋介の姿が屋上から消えた。

「いやだーっ！ 宮城さんなんでだよ！！」

フェンスに駆け寄り下を見た颯は絶叫し、フェンスを握り締め泣き崩れた。

後日、颯は洋介が死を選んだ理由を警察で知ることになる。

十六日夜。

洋介は父に殺されそうになり、逆に殺してしまったのだった。

女の人に生活させてもらってる、いわゆるヒモもような父だったが、いつかは父と子として向かい合う日がくることを願っていた洋介。

『いつかおやじと一緒に酒が飲める時が来るといいのにな……』

その思いを知っていた颯は愕然とした。

受け止めきれない現実をドラッグで麻痺させ、死への恐怖心さえ拭い去ったのだ。

だが警察はそんな内情は知らない。ただ洋介が父を殺したことで自殺の可能性もあるという見解があるだけ。

颯が捕まったのは、彼のことを好意的に思っていない仲間からの目撃証言があったからだ。

彼らは本当は見えていなかった。だが颯を陥れたかったのだ。

警察は颯の言葉を信用せず仲間達の目撃証言を信用した。

何度も殺していないと言ったが無駄にすぎなかった。

颯はもう誰も信用できなくなっていた。人間不信になるには充分だった。

そしてもう一つ事件が起こる。

洋介の恋人が自殺を図ったのだ。

事実を知らない彼女は、遺書に颯への恨みを書き連ねていた。

幸い命だけは取りとめたが、彼女の恨みは彼女の心に根深く残ってしまっていた。

次々と襲いかかる出来事に、十四歳の心は死んでしまった。

喜怒哀楽、どの感情もすべて失っていた。

双眸にくつきりと漆黒の闇を湛え、自分の周りに厚い壁ができていた。

結局証拠不十分で無罪にはなったが、颯は今度はグループ内にも居場所をなくし、一人で今まで以上に事件を起こし、補導され、少年院に送られることになったのだ。

*

*

*

「俺を人間に戻してくれたのは、保護司の中川さんだ。なかがわ少年院から出た俺を、半年間自分の家に招いて家族愛つてものを与えてくれた。高校へ行くことを勧めてくれたのも中川さんなんだ。義父にも高校くらいは出てもらわないと困ると言われたけど、それは世間体ではない。中川さんは俺の将来への可能性を広げるには、高校へ行って色んなことを見て感じ取ってみるのがいいと言ってくれたんだ。中川さんは俺にとって父親も同然の人だ」

颯は自分の過去をすべて沙夜に話して聞かせた。

隠していることはもう何も無い。

沙夜は颯の無実が何より嬉しかった。

しかし他の犯罪が事実であることに変わりはない。

颯もそれを知ってか、口を開く。

「俺には少年院にいた経歴と、誤りであってもこの記事が一生付いてまわる。俺と友達になるってことは、俺の過去のせいで和泉まで辛い思いをするってことなんだ」

颯は俯いて膝の上で組んだ両手をグッと握り締めた。

「もう俺に近づかない方がいい」

颯は声を押し殺し告げた。

傍にいて欲しい思いとは裏腹に、沙夜のことを思えばこそその言葉だった。

沙夜は無言で席を立つ。

その気配を感じて颯は沙夜が去っていくと思い、込み上げる感情を押さえるように目を閉じて俯いていた。

沙夜は静かに颯に近づいた。

すぐ横に沙夜の気配を感じた颯は、信じられない思いで彼女を見上げた。

沙夜は颯の頭を包み込むように、そつと彼を抱き締めた。

「和……泉？」

一瞬颯は何が起こったのかわからなかった。

だが沙夜の温もりが颯の心に染み込んでいく。

「本多くんは過去の罪を一生償わないといけないのかもしれない。私はそんな本多くんを守っていけるようになりたい」

辛い思いをすると颯は言った。

でも二人一緒なら乗り越えていけそうな気がした。

沙夜はこれまで以上に颯の存在を近くに感じていた。

この上なく愛しい人だと思った。

「本多くんの傍にいたい。私の心を熱くさせるのも切なくさせるのも、本多くんだけだってこと分かったの」

沙夜の想いを知り、颯の胸は高まった。

すべてを受け入れ自分を愛してくれる人など誰もいないと諦めていた。

ましてや自分の愛した人が愛してくれることなどありえないと思っていた。

颯は沙夜の温かな愛情に、思わず涙をこぼした。

「好きになってもいいのか……？」

颯の言葉を聞き、沙夜は腕を解き、彼を見つめる。

愛しさが募り、沙夜の瞳にも涙が滲んだ。

「私も好きになっても……いい？」

今度は颯が沙夜を包み込む。

「ありがとう」

颯はきつく沙夜を抱き締め、囁いた。

（彼女を守りたい。守れるよう強くなりたい。もう二度とあやまち

を繰り返したりしない)

颯は痛切に願った。

二人は長い間、そのままお互いの気持ちを感じ取るように抱き合っていた。

*

*

*

その日の夜。

沙夜は峻一の携帯に電話した。

そして事の次第を打ち明けた。

自分のことを心底心配してくれている彼にだけは、本当のことを知らせるべきと思ったからだ。

付き合うことになったと告げた時、峻一の心は複雑な思いにかられた。

殺人が無罪なのは分かった。

だが前科があるのは本当のこと。

そんな人と付き合うと、沙夜への風当たりが強くなるのではないだろうか。

今はまだ颯の過去を知る者はほんのごく僅か。だが、自分のようにいつか彼の過去を知ってしまう者が出るかもしれない。

もし周りに広まってしまってもしたら……。

そう考えると沙夜に「よかったな」とは言ってもやれなかった。

だが沙夜の声から思いは伝わってきた。

颯のことを過去を含めて受け入れようとしていることに。

そしてその過去によってもたらされるだろう辛さから目を背けず、立ち向かっていこうとしている姿勢を。

だから峻一は言った。

「頑張れよ」
と。

この先も今までと変わらず、沙夜の力になりたいと思いを込めて。

(5)

季節は夏を迎えていた。

学校は休みに入り、沙夜と颯も毎日のように会うことはなかったが、電話でのやり取りは逢えない分、毎日のようにしていた。

毎回、ほんの数分の会話でしかないが、声が聞けるだけでお互いの心は和むのだった。

颯は沙夜の前でだけ、表情豊かな顔をするようになっていた。

十八歳の少年の顔を垣間見せるのだった。

でも他の人の前でも、以前よりはかなり穏かな表情をするようになっていた。

初めは付き合い始めた二人を遠巻きに見ていたクラスメートも、時が経つにつれごく普通の友達として接するようになっていた。

一度は人間不信に陥った颯が、自ら心を開こうと、自分を変えようとする姿を、沙夜は温かな眼差しで隣りから見守っていた。

それに応えてくれたクラスメートの態度は、二人には救いだった。

*

*

*

久々に颯と逢えた沙夜は嬉しそうに彼の隣りを歩いていた。

今日は一日中、颯の家で二人して夏休みの宿題を片付けていたのだ。

夕方になり、少しは涼しくなった今、沙夜は颯に近くのパス停まで送ってもらっている最中だった。

「今度はいつ会える？」

「いつにしようか。今度は勉強じゃなくてどこか遊びに行こうか？」

「ホント！？ 私、遊園地がいい！」

無邪気に喜ぶ沙夜に、颯の顔もほころぶ。

二人ともまだデートらしいデートというものをしていない。

沙夜は前から初デートは遊園地がいいなあ……と思っていた。

少女趣味かもしれないが、観覧車に二人で乗るのが夢だった。

「じゃあ遊園地に決まりだな。また連絡するよ」

その時、横を通りすぎたバイク二台が急停車した。

メットを取って振り返った男二人の顔を見た颯は急に立ち止まった。

「颯？」

沙夜は、険しい顔で彼らを見つめる颯に不安を覚えた。

二人はバイクから降り、近づいてくる。

サツと颯は沙夜をかばうように、彼女の前に立ち塞がった。

「よお、久しぶりだな」

「……………」

「まじめに高校生やってるんだってな」

「今さら普通の生活ができると思ってるのか」

挑戦的な彼らの言葉に、颯はグツと奥歯を噛み締め耐えていた。

その様子に沙夜はハッと気づく。

彼らが颯と同じグループにいた人達だと。

そして恐らく颯のことを快く思っていないという、颯に殺人の罪をきせようとした人達だと。

(颯を守らなきゃ。でもどうやって?)

沙夜は自分をかばう颯の腕をギュッと掴んだ。

それに反応して、颯は微かに沙夜を見て小声で囁く。

「沙夜、合図したら走れ。途中で交番があつたの覚えてるな? そこに逃げ込むんだ、いいな?」

沙夜は目を見開いて颯を見た。

(颯を置いて逃げるの？ ああ……でも私がいたら足手まといに
かならない、きっと)

沙夜は自分がいるより、颯一人の方がこの場をどうにかできると
考えて渋々頷いた。

「分かった。でも無茶しないで」

颯は沙夜を安心させるように微笑んだ。

「何コソコソ話してるんだ？」

一人が沙夜に近づこうとした瞬間。

「GO!!」

颯が叫んで沙夜の背を押した。

沙夜は言われた通り、来た道をダッシュする。

でも不安から一瞬だけ後ろを振り返った。

見た光景に、沙夜の心に痛みが駆け抜ける。

沙夜を追おうとした男を止めようと、颯が男を殴ったのだ。

自分を助けるために人を殴った。

そのことが沙夜を悲しませる。

(私を逃がすために、過去に戻らないと誓ったあの颯が……)

彼を守りたいと思った自分こそが、彼を過去に立ち返らせてしまった。

沙夜は痛む胸を抱え、交番に駆け込んだ。

「助けてください、彼が不良に絡まれてるんです!!」

息を切らせ飛び込んできた沙夜に、巡査も慌てて対応する。

「こっちはです」

沙夜は再び巡査を連れて走り出す。

颯を早く助けたい一心で、自分のことなど疲れたとすら思わなかった。

再び戻ってきた所に颯も男達も誰もいなかった。ただ二台のバイクが残されているだけ。

「どこ行っちゃったの……」

見ると足元に血が点々と残っている。

沙夜に悪寒が走る。

(これは男達の……？ それとも……颯の？)

沙夜は周りを捜した。

所々に血の跡が残っているのを見つげながら。

すると表通りから一本入った道の奥から声が聞こえてきた。

「最初の威勢はどうしたあ」

「何で殴り返さないかなあ。こつもやられっぱなしじゃつまらないじゃないかあ。今さらマツトウな生活できると思ってたんのか？」

沙夜は場所を捜し当て息を飲んだ。

行き止まりの袋小路で、颯は上体をやっこのことで起こしていた。

かなり手ひどく殴られたのだとすぐに分かった。

その時、颯の絞り出すような声が聞こえてきた。

「俺はもう自分のことでケンカはしない。好きだけ殴るなり蹴るなりすればいい。俺は二度と昔には戻らない！」

信じていてくれる人がいる。

そのことが颯の心を強くした。

逆上した男達は更に颯に襲いかかる。

「やめて　　! !」

沙夜の悲鳴に三人がいつせいに沙夜を見る。

颯は瞬間、沙夜を守ろうと立ち上がった。…が、蹴りを入れて再び倒れてしまった。

「何をしている! !」

巡査が沙夜に追いつき怒鳴ると、男達は相手が警察と分かるや否や大慌てで逃げ出した。

「颯っ! !」

駆け寄ると、颯は朦朧とする意識で沙夜の手を握り締めた。

「ケガ……ないか? !」

沙夜の瞳から涙が零れ落ちた。

こんな状態でも、真っ先に自分を気遣ってくれる。

「ないよ。心配しないで」

こんなにまでして過去に戻らないとする颯。

その彼が自分のせいで人を殴ってしまった現実。

「ごめんね……」

沙夜の心の内を颯は感じ取っていた。

「後悔はしてない。俺には沙夜が一番大切だ…か…」

握っていた手が力なく地面に落ちる。

颯は意識を手放していた。

「颯？ ……颯!？」

「動かさない方がいい。今救急車呼んだから」

ポンと沙夜の肩に手を置いて巡査は言った。

「あ……ありがとうございます」

動揺するなという方が無理だった。

沙夜はこのまま颯が目を覚まさなかつたらどうしようと、不安で胸が張り裂けそうだった。

いてもたってもいられなくて、沙夜は鞆からハンカチを出すと額や鼻や口から出た血を拭きとっていた。

後のことは覚えていない。

記憶にあるのは、処置が終わり、大丈夫だからと告げられた後からのこと。

打撲数力所、左腕のヒビ、それと頭も打っているようだから入院

も必要となった。

幸い内臓の損傷はないとのこと。

今は鎮静剤が効いて眠っているから、沙夜は帰るように言われた。

本当は颯が目覚めた時一人にしたくはなかった。

だが面会時間も過ぎている。規則を破ることはできなかった。

沙夜は心残りのまま病院をあとにした。

そして沙夜にはもう一つショッキングなことがあった。

颯の運ばれた病院は、彼の義父の働く病院だった。

知らせを受け、担当医から症状を聞いた後、彼は近くに沙夜がいたのも知らずこう呟いた。

「まったく、ちょっと大人しくなったかと思えば結局またこれか。いい迷惑だよ」

義理とはいえ父親の言葉とは思えなかった。

一番信じてあげなくてはいけない人がこの態度だったことに、沙夜は鈍器で頭を殴られた気がした。

そしてより強く思った。

(私だけでも颯の近くにいて、彼の力になりたい、守っていききたい)

と。

*

*

*

次の日は朝から病院を訪れた。

沙夜が着くころにはすでに颯は目覚めていた。

「痛い？」

「大丈夫だよ」

沙夜は颯の右側に椅子を持っていき、腰掛けるとそっと颯の手を握った。

「怖い目にあわせてごめんな」

握り返し、颯が呟いた。

「ううん、謝らないで。謝るのは私の方だよ」

「違う。巻き込んでしまった俺のせいだよ。それに俺は後悔はしてないから……。沙夜に危害がおよぶなら俺は戦うよ」

「……私、どうすれば颯を守れるのかな。昨日だって私を逃がすためだけに相手を殴ったんでしょ？ その後は相手に一度だって手をあげてないんだよね。……どうしたら颯の力になれるのかなあ」

「もう力になってるよ」

意外な一言に沙夜は颯を見つめる。

颯も穏かな顔で沙夜を見つめた。

「信じてくれる人がいる、大切に思ってくれる人がいる。それだけですごく強くなれるってことよく分かったよ。沙夜がいてくれたから、俺は過去を振り切れたんだ」

ふと沙夜の脳裏に颯の義父が浮かんだ。

彼がもし颯の味方だったなら、もっと早く立ち直れたかもしれないのに……と。

しかし元々彼のせいで颯が不良になってしまったといってもいいのに、その責任を少しも感じていない。その彼に何を言っても無駄な気がした。

その時コンコンと扉を叩く音がした。

「どろぞろ」

入ってきたのは一人の男性。

その男は挨拶も程々に、胸の内ポケットから手帳を取り出して見せる。

(……警察手帳)

ドラマではよく目にしていたが、本物を初めて見た沙夜はドキッ

とした。

「事情聴取ですか？」

「慣れたものだな。さすが前科ありだな」

警察は冷静な態度の颯に、嫌味のような口調で言った。

「話してもらおうか」

颯は視線を落とし、抑揚の押さえた声で語り出す。

「街中で偶然昔の仲間に出会って、ケンカをふっかけられただけです。あいつらにとって昔から俺は邪魔な存在でしたから。」

「相手の名は？」

「近藤聡司と甲斐英喜。でも俺、ヤツらを訴えたりしませんよ」

颯は自分のまいた種なんだからと心の中で思った。

「仲間にならないかとも言われたんじゃないのか？ 聞くところによると、今高校に通っているそうだな。喧嘩沙汰を起こすとは昔とちつとも変わってないようだな。結局少年院に入ったって更生できるわけじゃないってことか……」

嘲笑うかのような言葉に、颯は両のこぶしを握り締めグツとこらえる。

沙夜は息ができなくなるくらい胸が苦しくなった。

一度道を踏み外した人間は、二度と元には戻れない。

この警察の言いたいことが、沙夜にも苦く伝わってくる。

そして言われた当の本人のことを思うと、刺されたような痛みを痛切に感じた。

(颯は頑張ってるのに、どうして認めてはくれないの?)

これが罪の重さなのかと、沙夜は悲しくなった。

「学校にも連絡がいくから、何らかの処分がでるだろうな」

(処分……て)

沙夜は息を飲んだ。

停学か、悪ければ退学ということなのだろうかと考えが巡る。

「待って下さい!」

沙夜は警察官に駆け寄った。

「君は?」

訝しげに沙夜を見下ろす警察官。

沙夜は一瞬男の威厳に押されそうになったが、颯を守りたい一心で臆せず男を見上げた。

「私は颯のクラスメートで、今彼と付き合ってます」

警察官は驚く。

颯に付き合っている女がいること。そしてその女がごくごく普通の女の子であることに。

「君はこの男が過去に何をしたか知っているのか!？」

「知ってます。何もかも颯から聞きました」

警察官はますます意外な顔をする。

「じゃあなぜ付き合ってるんだ？」

「おかしいですか？ 私みたいな女の子が颯と付き合つのが、そんなに変ですか？ 一度過ちを犯したらまた同じ過ちを繰り返す。…そういう偏見を持っているから、今だって颯に問題があるような言い方するのよ」

やり切れない思いが口をついて零れる。

颯は自分をかばう沙夜の思いに愛しさが募る。

「沙夜、……もういいから。俺のことでお前が辛い思いすることはない」

颯の言葉に沙夜は彼を見つめた。

(一番辛い思いしてるのは颯なのに……)

颯の瞳が優しく沙夜を包み込む。まるで諭すように……。

「だって颯は悪くないのに……。私を守るためなのに……。自分のためには一度だって手をあげてないのよ」

弱々しく呟く沙夜。

颯は傍らに立つ沙夜の手を優しく握った。

「偏見か……。だが再犯が多いのも事実だと知っているかい、お嬢さん。これだけは忠告しておこう。いつ裏切るか分からないヤツの傍に、君のような子がいるもんじゃないよ」

沙夜は怒りと絶望を湛えた瞳を警察官に向けた。

(何てひどいこと言うの……)

沙夜の震える手を、颯は力強く握り締めた。

颯も強い憤りを感じていた。

だがそれ以上に負けまいとする思いが勝っていた。

「確かに再犯率は高いのかもしれない。けれど100%じゃない。俺は二度と罪は犯さない。必ず過去と決別してみせる。今の俺には信じてくれる人がいるんだ。絶対裏切るようなことはしない、決して！」

颯の力強い言葉に、警察官はたじろぎながらも、「どうだか」

と一言だけ残し、去っていった。

沙夜も颯に見とれていた。

精悍で野性的な瞳。

昔、何でもやりかねないと思わせる人物だった……ということをつとと思い出した。だが怖いという思いはなかった。

力強い、人を惹きつける瞳に、沙夜はそんな颯の激しい部分を垣間見た気がした。

かつては自分を守るために周りに向けた攻撃的な瞳。

今は己に向けられた決意を秘めた瞳。

どちらも力のこもった瞳ではあるが、その意味は対照的だった。

「沙夜」

呼ぶ声に我に返ると、颯はまた穏かな表情で沙夜を見つめていた。

沙夜は自分の手を握る颯の手を、空いている方の手で更に覆う。

「颯、大丈夫？」

不安げに沙夜は呟いた。

颯は答えるように手に力を込めた。

「大丈夫だよ。沙夜、ありがとう」

沙夜は何度も首を横に振る。

その瞳には涙が浮かんでいた。

颯の力になりたいのに何もできない自分が齒がゆかった。

「これが現実なのかな。……これが罪の重さなのかな？」

過去に犯した過ちが、今も真つ先に疑われることを生む。

そして向けられる、またかという冷たい視線　。

「人間は正道よりも間違つたことを記憶にとどめる生き物だつて言つた人がいる」

「えっ？」

ふと颯が言つたことの意味を理解できなかった沙夜は、小首を傾げた。

颯は沙夜の手を引き、自分のベッドの横に向かい合う形で座らせた。

「保護司の中川さんが教えてくれたことなんだ。人は善い行いをして、それは当たり前のことと受けとめられやすく、周りもたいして気にもとめない。でも間違いを犯したら、またやるんじゃない

かつて疑惑を抱かれやすいし、嫌悪感を持つ人もいる。良い噂よりも悪い噂の方が広がりやすいし、伝わるのも早いだろ？ たとえ俺がいくら善い行いをしたとしても、過去のことでガラリと俺の印象も変わってしまう。他の人に比べて俺への風当たりは厳しいだろうけど、負けてはいけない、諦めちゃいけない。……中川さんは俺が挫けそうな時、何度もそう言っただけで励ましてくれたんだ」

だから今も頑張れる……と颯は伝える。

沙夜は颯が自分の置かれた立場を、正面から受けとめようとしていることを感じ取っていた。

颯の存在を大きく感じた。

(私も辛いからって目をそむけてちゃダメだね)

「私も頑張るよ。颯と一緒に頑張るよ」

沙夜が言うと、颯の表情が少し曇る。

「……………颯？」

沙夜は不安げに颯の顔を覗きこんだ。

(……………あっ)

すると沙夜の体は自分の意思とは関係なく、颯の胸に倒れこんだ。

颯が急に沙夜の肩を引き寄せたからだ。

沙夜は驚きのあまり、目を丸くする。

やがて耳元に颯の声が聞こえてきた。

「沙夜、学校がたとえどんな処分を下そうと、お前はお前のままでいて欲しい。決して無茶はしないでくれ。俺も絶対ヤケになったり、昔に戻ったりしないから。すべてをありのまま受け入れる覚悟はできているから……」

颯の決意を聞かされた沙夜は、信じられない思いで彼の顔を見上げた。

それは退学すら覚悟している颯の言葉だったのだ。

普通の人なら停学で済むことも、颯の場合は退学になるのかもしれない。

「私の……せいだ」

沙夜は唇を噛み締め、俯いた。

（私さえあそこにいなければこんなことにはならなかった。颯一人なら逃げ切れたはずなのに……）

己を責める沙夜の左頬を颯は右手で包み込み、決して自分から目を逸らせないように上を向かせた。

「沙夜のせいじゃない」

力強い瞳に見入られた沙夜は、瞬きすら忘れていた。

「自分を責めるのはやめてくれ。すべてを承知で俺がしたことだし、俺が沙夜を守りたかっただけなんだから」

「すべてを承知で？」

「そつだ」

警察に嫌味を言われることも、学校を辞めさせられるかもしれないことも、初めから颯は覚悟していたというのか……と、沙夜はその悲愴な決意に胸が痛んだ。

「沙夜には言っておくよ」

「……何を？」

颯の悟り切った表情を見て、沙夜は心臓が鷲づかみされたような気がした。

次に放たれる言葉を聞くのが怖いと思った。

「俺はたぶん退学になると思う」

沙夜はできることならその一言を耳を塞いで聞きたくはなかった。

しかし颯が自分を大切に思ってくれてるのが分かるから、彼の心に応えなくてはと、体に力を入れ、今にも動こうとする手を止めた。

じっと聞こうとする沙夜の思いを知って、颯もまた、その心に報いようと自分の今置かれている状態を告げる。

「俺は入試の面接で一つ条件を出された。もし警察沙汰になるような問題を起こしたら退学にすると。それが少年院出の俺を受け入れる条件だったんだ」

「そんな……。罪は少年院で償ったのでしょうか？ それなのに何で入学に条件なんか付けるの？」

「俺の存在が学校にリスクを背負わせることになるからな。それでもこんな俺を入学させてくれたんだ。学校を責める気はないよ」

笑みさえ浮かべて言う颯を見て、沙夜の胸が痛む。

沙夜は目を伏せた。

「颯が退学になったら、私も学校辞める……」

呟いた沙夜の言葉に、颯の息が一瞬止まる。

今の生活を捨ててまでも自分を慕ってくれる、その心が胸に染み
た。

そして守りたいという思いが湧き上がる。

「その気持ちは嬉しいけど、本当にそんなことはしないでくれ。俺
が守りたいのは自分の生活じゃない。お前の生活、……お前の幸せ
なんだから」

「私の幸せ？」

颯は見上げる沙夜の頭に右手をポンツと置いた。まるで小さな子を諭すかのよう。

「そう。それにたとえ学校を退学なっただって俺は俺。今までと変わらない。この先、就職するにしても、また学校に入りなおすにしても、将来が閉ざされたわけじゃない。そうだろ？」

微笑みかけてくる颯に沙夜はそれ以上何も言えず、ただ小さく頷いた。

悲観してはダメだと思いつつも、それでも沙夜は心の片隅で思っていた。

何の役にも立ててない、未熟な自分の無力さを。

(6)

翌日、一人の見舞い人が訪れた。

「中川さん！」

初老間近といった一人の紳士を目にした颯は立ち上がろうとする。

その男性は慌てて彼を止めにかかった。

「まだ打撲が痛むだろう。そのままでもいいから」

言葉に温かみがあった。

颯ははにかんで元の位置に戻った。

沙夜は椅子から立ち上がり、一礼する。

(この人が颯の恩人の中川さんなのね。優しそうな温かそうな人)

沙夜も好感を持った。

中川もニツコリと、

「こんにちは」
と答えた。

「中川さん、すみません」

颯は申し訳なさそうに頭を下げる。

「また警察沙汰なことを起こしてしまつて……。ご迷惑お掛けしました」

中川は、頭を下げ続ける颯の肩に優しく手を置いた。

「ハイ、これお見舞い。奥さんの手作りパン。好物だったよね」

思いもかけない、温もりのある言葉に、颯はキョトンとして顔を上げた。

それに答えるように、中川は優しく頷いた。

「分かつてるよ。君はもう訳もなく人を傷つけたりはしないってこと。それに君が本気をだせば、君がこんな大怪我するなんてことないよね？ 相手が大怪我するなら考えられるけど」

中川の言葉を聞いて、沙夜はちよつと驚いた。

実は颯がかなり喧嘩が強いと知つたからだ。

(ひよつとして颯は負け知らず……?)

そんな考えがふと横切つた。

「君が戦つたのは相手じゃなかった。己自身と戦つた。そうだよね」
「？」

颯は中川に心を見透かされ、
「はい」

と一言力強く頷いた。

「それならば私に謝る必要はない。君が頑張っているって分かって、私は嬉しいよ」

颯も沙夜も、その言葉がとても嬉しかった。

結果だけではなく、過程もちゃんと見ていてくれる。そして認めてくれる。

その存在が二人には心強く感じた。

冷たい視線に晒され続けた苦しみ、癒えていくのを感じていた。

「それはそうと、このお嬢さんを紹介してくれないかな？」

部屋の雰囲気を変えようと、中川は話題を切り替えようとする。

中川の言葉に、颯も沙夜も忘れてた…というような顔をして視線を合わせ、互いに微笑んだ。

「彼女がお話した和泉沙夜さん。俺の大切な子です」

ストレートな颯の言葉にちょっと照れながらも、沙夜は中川に深々と頭を下げた。

「初めまして。和泉沙夜です。中川さんのことは颯から聞いてます。大切な恩人で、父親代わりの人だって」

「初めまして。君があのだね」

沙夜の言葉を聞いた中川は納得したように頷く。そして颯を見て微笑んだ。

「いい子に巡り逢えて良かったじゃないか」

颯は噛み締めるように頷いた。

「本当にうれしかったです。沙夜が俺の過去を知っても、真っ直ぐ俺を見つめてくれたことが。俺を愛してくれたことが。本当に嬉しかった」

見つめて言った呟くような熱い想いを、沙夜もまた胸が熱くなる思いで聞いていた。

（私も颯と巡り逢えて本当によかった。今ならはっきり言える。颯以外の人は考えられないって）

沙夜の脳裏に、初めて逢った入学式の様子が浮かんだ。

ぶつかった拍子に僅かに交わした視線。

漆黒の闇を湛えた双眸に心を奪われた一瞬。

あの時は想像もできなかった。

人をこんなに愛することになるうとは。

自分のことよりも、この目の前にいる人を大切にしたい。そんな思いを抱くことになろうとは。

「さあ皆でこのパンでも食べようか」

二人の想いを感じ、親心のように頼もしく思った中川が安心したように言った。

「じゃあ私飲み物買ってきます。何がいいですか？」

沙夜は鞆から財布を出そうとした。

「お金は私が出すからいいよ」

「え…でも……」

沙夜が申し訳なさそうに呟くと、颯も、

「俺が出しますから」と言った。

「いいからいいから。ここは社会人の私にまかせなさい」

大らかな中川に言葉に、沙夜と颯はアイコンタクトを交わし言う。

「じゃあお言葉に甘えて」

「ごちそうになります」

沙夜は中川からお金を受け取った。

「中川さん、なに飲みます？」

「ではコーヒーお願いしていいかな？」

「コーヒーですね。えーと颯は……」

「俺もコーヒー」

ポツリと言った颯の言葉に、沙夜は口を尖らせる。

「だーめ、颯は牛乳。腕の骨ヒビ入ってるんだからカルシウムとらなきゃ」

苦笑いする颯を見て、中川から笑い声がこぼれる。

「ははは……っ、颯が尻に敷かれるとこ見れるとは思わなかったよ」

中川が言うと、沙夜の頬が赤く染まった。

そんなことはおかまいなしに中川は続ける。

「その調子でこれからも颯のこと、頼むよ」

頼もしげに言う中川の言葉に沙夜は照れながら頷くと、そのまま売店へと足を向けた。

中川は空いた椅子に腰掛けると、穏かな表情を颯へ向けた。

「本当にいい子に出逢えたな。君の顔つきが優しくなったのは彼女のおかげのようだ」

颯は真っ直ぐ中川を見て頷いた。

「俺も驚いてます。……こんなにも誰かを愛する心がまだ自分にあったことに。そしてその人を守りたいと思う心があったことに」

颯は沙夜の顔を、彼女の眼差しを思い浮かべていた。

『私の心を熱くさせるのも切なくさせるのも、本多くんだけだったこと分かったの』

『私も好きになっても……いい?』

もう死んでもいいと思えるくらい、その言葉は颯の心を熱く満たした。

出逢った時には想像もつかなかった。

人を愛する想いが自分に湧き上がることになろうとは。

彼女の想いを泣けるほど嬉しいと感じることになろうとは。

そして一番の驚きは、この自分の想いを受け入れてくれた彼女の存在。

自分といたって彼女には何のメリットもありはしない。それでも彼女は自分を選んでくれた。

ならば自分は何にかえても彼女を守りたいを思った。

たとえ自分の過去の疵をさらけ出すことになっても、彼女の幸せを守りたいと思った。

それが自分にできる唯一のことだと思ったのだ。

「中川さん、本当に沙夜は俺にはもったいないくらいの子です。だからこそ時々思うんです。こんな俺が彼女の隣にいていいのかって。彼女の幸せを願うなら、俺が傍にいたべきじゃないんだって…」

中川は、重い声で呟くように言った颯の肩を励ますようにポンッと叩いた。

「自分を卑下してはいけないよ。過去の過ちはこれからとり返していけばいい。償っていけばいい。その心を忘れなければ、君は彼女の傍にいていいんだよ。それに見ていけば分かるよ。沙夜さんの君に対する純粋な想いが。彼女は損得で君を愛したんじゃない。ただ君が好きだから傍にいるんだよ」

だからこそ……と颯は迷う。

愛しているからこそ、彼女を守りたい。

なのに自分が彼女を傷つける存在になってしまいかもしれない。

共にいるがゆえに彼女を傷つけてしまう、その恐怖。

別れることで彼女を失う、その恐怖。

どちらかを選ばなければならないのかもしれない。

颯の胸の内は葛藤していた。

「沙夜を今回のようなことに巻き込んでしまったらどうしようって、俺怖いんです。今回は危害を加えられずに済んだけど、守りきれなかったら、沙夜を傷つけられたら、俺は自分を許せない。それに沙夜の心を傷つけてしまふんです。巻き込まれて怖い思いをしただろうに、俺を決して責めようとはしない。自分を責めるんです。俺が人を殴ったのは自分のためなんだって、俺を過去に立ち返らせてしまったんだって、真っ先に己を責める子なんです、沙夜は」

何に変えても守りたい大切な存在なのに、自分が苦しめてしまっている。

どうしたら彼女の笑顔を守れるのか。

どうすれば彼女の幸せを守れるのか。

答えを出すことを颯は恐れていた。

「君も沙夜さんも、まだ人を愛すること愛されることに慣れていなくて不器用のようだ。お互いがお互いを想い合って苦しむことがこの先もあるだろう。でも自分の心を大切に思うことも、おざなりにしてはいけないよ。いいね？」

中川の言葉の意図を、颯は何となく察した。

「そう……ですね」

颯は曖昧な返事しかできなかった。

沙夜の隣に、この先もいていいのか。

自分の想いに正直に、自分の想いを最優先にしたら、沙夜を離したくはない。

たった一人の唯一無二の大切な人。

彼女の代わりには誰にもなれない。この先二度とは出逢えない大切な存在。

しかし自分の想いだけで彼女を縛り付けてもいいのだろうか。

しばらくすると、コンコンとドアをノックする音が室内に響いてきた。

そしてドアが開くと、ひょっこり沙夜が顔を覗かせた。

「ただいま」

軽い足取りで沙夜が歩いてくると、中川は椅子から立ち上がり席を空ける。

「あ、いいですよ。座って下さい」

沙夜は中川に言いながらコーヒーを手渡した。

「じゃあ遠慮なく」

中川は沙夜に言われ、もう一度腰を下ろした。

「いえ、こちらこそごちそうになります」

沙夜は言って颯に歩み寄ると、パックの牛乳にストローを挿して手渡す。

「ありがとうございます」

「しっかり飲んで、早く治そっ」

無垢な笑顔を見せて言う沙夜の顔を見つめる颯の表情は、どこか浮かない色である。

「どうかしたの？」

気づいた沙夜が尋ねた。

「何でもない」

聞かれた颯は心に残る迷いを悟られまいと、何でもないフリをして答えた。

沙夜はどこか腑に落ちないものを感じながら、でもたいして気にもとめることはなかった。

そうして三人で見舞いのパンをほおばりながら、数十分の談話の後、中川が帰宅のため席を立った。

「お大事に。何かあったらいつでも家に来たり、電話くれていいからね」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃあ、また」

颯は一礼して中川を見送る。

「私、玄関までお送りします」

沙夜は、病室を出ようとしていた中川に駆け寄って、一緒に病室を出た。

隣を歩く女の子に中川は話しかける。

「これからも颯のこと、よろしく頼むね。普通なら悩まなくていいことも、君達には振りかかるかもしれない。ぶっきらぼうなところもあるし、本音をあまり言わないあの子が君にだけは心を開いて優しい顔を覗かせる。あの子にとって、君は何にも代えがたい存在だ。てことよく分かったよ。だからこそこれからもあの子の傍で、あの子を支えてあげて欲しい」

ふと沙夜は歩みを止めた。

「沙夜さん？」

沙夜は思い詰めた顔をして中川を見上げる。

「私、颯の傍にいいんでしょうか？ 私のせいで彼にムチャさせているんじゃない……。中川さんみたいに颯を支えてあげられるのか、自信ないんです。今日中川さんに初めて会って、なかなか会えない二人だけど、中川さんが颯のこと信じてるってこと分かって、二人

の絆を感じて……。私もそんな存在になれるのか、颯の負担になるだけじゃないのかって不安なんです」

中川は、沙夜とそして颯の内に秘めた想いを知って、心の奥で二人の強い想いに人としての温かさを感じた。

好きだからこそ相手のことをまず第一に考えてしまう。

それゆえお互いのことを想いあって苦しくも不安にもなる。

二人とも優しい。優しすぎるのかも知れない。

自分の想いを最優先にするような人間だったら、こつも悩まなかつただろうに……。と中川は思った。

「沙夜さんの存在は、颯に力を与えることはあっても、決して負担になったりはしないんだよ。颯はね、自分のことで君が苦しむのを、己を責めるのを見るのが辛いんだ。君がそれだけ颯のことを想っていてくれるってことだけど、どうか颯の想いを汲んで、まず二人で乗り越えていくことを考えていつて欲しい」

(二人で乗り越えることをまず考えて……)

沙夜の心に中川の言葉がこだました。

起こってしまったことをいくら後悔したって仕方のないこと。

そこから同じ過ちを繰り返さないよう、二人でどうすればいいのか考えていくことの方が大事なのだと、沙夜は中川の言葉を受け止めた。

「中川さん、今日は本当に色々ありがとうございました。私、中川さんに相談できてよかったです。颯と二人で苦難を乗り越えていけるよう頑張ります」

玄関先で別れる時、沙夜は中川に言った。

中川はその言葉を聞いて、頼もしげに微笑んで頷き、病院を去って行ったのだった。

*

*

*

次の日。退院を翌日に控えた日でもある。

重い表情をしていた颯が、一晩考えて決心したことを切り出した。

「別れよう、沙夜」

「……………え？」

信じられない言葉に、沙夜は耳を疑った。

颯は真っ直ぐに沙夜を見つめた。

「ただの友達に戻ろう」

沙夜の表情が凍りつく。

(颯は冗談なんか言う人じゃない)

「いや……。そんなのやだよ。どうして急にそんなこと、言うの……？」

口も手も震えが止まらない。沙夜はそのくらい動揺していた。

颯はその震える手を右手で握り締めた。

「ずっと考えてた。沙夜を幸せにできるのか……。俺は沙夜を苦しめるだけの存在なんじゃないんだろうか……。どうすればいいのかわかってたはずなのに、結論を出すのが怖かった。俺は沙夜の隣にふさわしくないって」

颯の言葉を聞いて、沙夜はハッと気がついた。自分も颯と同じことを考えていたことに。

自分が彼の傍にいてもいいのか。

それは沙夜の疑問でもあったのだ。

「昨日ね、中川さんに相談したの。私は颯の傍にいてもいいのかって。颯の負担になったりしてないかって。中川さんは起こってしまったことを悔むよりも、二人でそれをどう乗り越えていくか考えていって欲しいって言ってたよ」

颯は沙夜を抱き寄せた。

乗り越えられることなら乗り越えていきたい。取り戻せるものなら取り戻したい。でももしやりなおしのきかないことが起こったら、悔んでも悔みきれない。

沙夜の幸せを考えるのなら、この方法が一番彼女にとってもいいことなのだ。颯は自分を納得させる。

「沙夜。俺が一番恐れているのは自分の過去が露呈することじゃない。沙夜を巻き込んでしまうこと、沙夜に危害を加えられるのが一番怖いんだ。……沙夜を失うのが一番怖いんだ。分かって欲しい」

沙夜を抱く腕に力がこもる。

(震えてる。……颯の手が震えてる)

颯の苦悩を感じ、沙夜もまた颯の胸に置かれていた手でギュッと服を握っていた。

「好きなもの、傍にいたい。……それだけじゃダメなの？」

彼を二度と一人には、孤独にはさせたくはなかった。

何より自分が彼の傍にいたかった。

なのに自分の存在が、誰よりも大切な人を苦しめている。

「沙夜。お前の真っ直ぐに俺を見つめてくれる瞳が好きだった。温かな心がいつも俺を包んでくれていた。俺の凍った心を溶かしてくれたのは他の誰でもない。沙夜、お前だ。何に代えても守りたかった。身も心も……。今度のことで思い知ったよ。お前を守るには離れるのが一番の方法だと。……皮肉にもね」

沙夜は颯の胸の中で首を振って否定した。

それでももう分かっていた。

颯の頑なな決心を。颯の苦しい思いを救うには、別れるしかない。

そしてその思いを受け入れようとしている自分の心を。

悟った時、沙夜の瞳から涙が溢れ出した。

（好きだけじゃダメなことってあるんだね。颯の心を救うには、私は友達に戻るしかないのかも……。友達として彼を孤独から救うことしかできないのかもしれない。でももう友達に戻れないよ……）

沙夜は知ってしまったていた。

人を想うことの心の熱を。その強さを。

一度湧き上がった熱い想いは、そう簡単には冷めはしない。一度想いが通じたのなら尚更に。

お互い今も心は変わらないのに、その心を押さえて友達として向き合う自信が沙夜にはなかった。

そしてそれは颯も予想したことだった。

真っ直ぐに想いをぶつけてきた沙夜に、心を曲げる真似はできない。

口では「友達に戻ろう」とは言いながら、別れはイコール他人になることを意味していた。

友達ではなく、ただの知り合い。

颯は想いを押さえ、口を開く。

「沙夜。俺のことは忘れて、他の誰かと幸せにな。……沙夜ならもつといいヤツと巡り会えるよ」

颯の言葉に、沙夜は涙で充血した目を見開いて彼を見上げた。

彼の言葉が信じられなかった。

(颯は忘れられるの？ ……私にはできない)

時が解決してくれるとはよく聞くんが、沙夜には無理なことに思えた。

見つめていると、颯の瞳が切なく揺れていることに沙夜は気づいた。

その瞳からほとばしる想いが、痛いほど沙夜に伝わってくる。

(颯はいつだって私のことを一番に考えてくれる。私のこと想っていてくれる)

苦しまないように選んで言った颯の言葉を、沙夜は静かな心を受け止めていた。

「颯の気持ち、分かった。颯の言う通りにする。……友達に戻るよ」

一言一言、やっこのことで沙夜は言葉を口にした。

颯もまた、静かにその言葉を受け入れた。

「ありがとう。ごめんな、辛い思いばかりさせて……」

「うっん……」

この心は変わらない。

たとえ今一緒にいらなくても、他の人を愛することはないだろう。未来に共に歩める望みがあるのなら、この想いは冷めはしない。

(私は颯のこと、今もこの先も……ずっと好き)

颯も心の内で思っていた。

この先沙夜が誰と付き合おうと、自分のことを忘れようと、沙夜を見守っていかう。この想いはずっと胸の内に秘めたままになろうとも　と。

(もう二度と言えないかもしれない。沙夜……愛してる)

颯は沙夜を抱く腕を解き、その手で彼女の頬に触れた。

見つめあう二人の想いは、愛しい者へ注ぎ込まれていく。

(愛してる、……愛してる)

二人はただもうその言葉を胸の内で呪文のように繰り返していた。

やがて、颯は静かに沙夜の唇に自分のそれを重ねた。

生まれて初めての、愛する人との口付け。

颯は初めて知った。心の通ったキスが、こんなにも心に響くものだということ。

唇から痛いほどの想いを受けた沙夜の瞳からは、新たな涙が一筋頬を伝って流れ落ちた。

（忘れない。この切ないファーストキスも、颯の想いも、心に刻みつけておくの……）

いつの日か再び笑顔で彼の隣にいる、その日がくることを沙夜はただ祈っていた。

(7)

二学期。

始業式の朝。

沙夜が玄関を開けると、一人の少年が門にもたれている体を起こし、こちらに向き直っていた。

「おはよう!」

元気な声が沙夜の沈んだ心に響く。

「お……おはよ

」
「迎えに来た。一緒に学校行こう」

沙夜は微かに笑った。

待っていたのは峻一。

彼と萌子の優しさに、沙夜はこの夏どれほど救われただろう。

沙夜は二人に颯とのことを大筋話していた。

あの日以来、沙夜は落ち込んでどこへも行かず、家の中ばかりにいた。

携帯電話も充電の切れたままになっていた。

たまには遊ぼうと連絡を入れる峻一と萌子だったが、いつ電話しても「電源が入っていません」のメッセージが流れるばかり。

自宅に電話してようやく話ができたかと思えば、ずっと家にいたという沙夜。

何かあったと直感した峻一は、同じく心配していた萌子を伴って沙夜の家押しかけ、事と次第を聞き出したのだった。

それからといもの、峻一は沙夜がなるべく考え込まないように家から連れだし、色々な場所へ行き、気分転換を図ってくれていた。

海やプール。動物園や遊園地。近場ではゲームセンターやカラオケ、デパート巡りのショッピング。

もちろん萌子も一緒に。

二人の優しさが胸に染みた。

友達のありがたさを心底感じた。と同時に、沙夜は颯とは友達に戻れないことを改めて思い知った。

自分の心を隠し、笑顔で彼の傍にることなど無理だと思った。

想いが溢れ、きつと涙が流れてしまう。

颯との思い出に触れただけで心が締め付けられてしまうというのに、本人を目の前に心を押し殺すような器用な真似はできないことだった。

『どこか遊びに行こうか？』

『ホント！？ 私、遊園地がいい！』

『じゃあ遊園地に決まりだな。また連絡するよ』

遊園地で観覧車を見上げた時、心によぎった思い出。

叶わなかった約束。

本当なら初デートで二人観覧車に乗っていたはずだったのに……
と思っただけで、あの時沙夜は泣いてしまい、峻一達を戸惑わせて
しまったのだった。

「よかった。沙夜、ちゃんと学校出てきてくれて」

道を歩きながら、峻一が安心して言った。

沙夜は言葉にならず、ちょっとはにかむ。

今日学校へ行けば、颯の処分が発表されているのだ。

颯本人にはたぶん事前に通達されているはずなのだが、あの別れ
以来、沙夜は颯と連絡を取っていなかった。

颯も何も言っではきていない。

停学か。それとも 退学か。

沙夜は知るのが怖かった。

(今日は颯、学校に来るのかな)

颯とどんな顔をして会えばいいのかも分からない。

普段と同じようにしようとは思うのだが、自分がどんな行動にでるのか、自分のことなのに予測がつかない。

そして処分を知った後、颯にどんな顔して会えばいいのかも分からない。

(颯は私に自分を責めるなど言ったけど、何事もなかったかのように私だけ普通に学校生活送るなんて、やっぱり心苦しいよ)

「松岡くん、お願い。颯の処分聞くととき傍にいて……」

小さく震える声で言った沙夜の心の内を悟った峻一は、隣にある沙夜の手を強く握った。

その強い力に、沙夜の心は頼りになる者を見つけたことで、少し安心感を得たのだった。

*

*

*

教室に入るなり、クラスの女子が沙夜に走り寄って来た。

「ちよつと和泉さん。本多くん、一週間の停学ってどういうこと!」

沙夜は現実を唐突に知らされ、胸に鋭利な物が刺さったような衝撃を受けた。

「停……学？　一週間……？」

呟く沙夜の二の腕を、峻一はグッと掴み、顔を覗き込んだ。

「大丈夫か、沙夜？」

強張った表情が返ってくる。

「えっ……知らないの？　和泉さん、本多さんと付き合ってるんでしょー!？」

クラスメートは沙夜の様子に意外そうに言った。

「それ誰に聞いたんだ？」

峻一が尋ねる。

「職員室の前の掲示板に貼り出してあったのよ!」

それを聞いたとたん、峻一は沙夜の手を引っ張り駆けだした。

「ま、松岡くん？」

「確かめよう。本当に停学なのかどうか」

峻一に連れられながら、沙夜の心は乱れていた。

退学を覚悟していたくらいだから、停学ですんでよかったのかも
しれない。

しかし停学という言葉だけでも、沙夜はその重みをひしひしと感
じていた。

職員室へ来ると、その廊下は少し人が集まっていた。

峻一は沙夜を引っ張り、人をかき分け最前列へ出た。

(あつ……)

一枚の掲示物を見た瞬間、沙夜は声を漏らしそうになる。

『一年四組本多颯。右の者、一週間の停学に処す』

(事実だったんだ)

一瞬ふらついた沙夜を支え、峻一はその場から離れ、人通りの少
ない廊下の突き当りまで移動した。

「沙夜、大丈夫？」

聞きながらも峻一は沙夜が動揺しているのを感じていた。

握り締めた手からは、沙夜の震えが伝わってきていた。

沙夜も一生懸命落ち着こうとはしているのだが、突きつけられた
現実をまだ心の中で処理できないでいた。

「松岡くん。停学一週間って私の見間違いない……よね？」

「……ああ」

峻一の沙夜に言ってきたかせるような返事に、沙夜は目を閉じ、数回深呼吸を繰り返した。

「……少しは落ち着いた？」

「うん……うん、たぶん」

まだ心拍数は高いが、深呼吸したら幾分ましになった気がした。

「沙夜。とにかく最悪の事態だけは免れたんだ。学校辞めなくて済んだんだ。今度はお前がすっかりしなきゃ。いつまでもお前が暗い顔してちゃ、本多だって辛いだろ？」

峻一の言葉に沙夜はうな垂れる。

（分かってる。……分かってるけど颯にどんな態度をとったらいいの？）

己を責めるなと言った颯。

何もなかったように振る舞えたらどんなに気が楽だろうか。

沙夜はやはり今回の一件で、己の責任を痛感せずにはいられなかった。

「松岡くん。私、颯に会わず顔ないよ……」

それを聞いた峻一は、沙夜の両肩をガツシリと掴んだ。

「そんな弱気でどうするんだよ。本多と付き合うつて俺に言ってきた時のお前、どこいったんだよ。あの時のお前は辛いことから逃げずに立ち向かっていこうとしたじゃないか。今は距離を置いてるけど、いつか元に戻るって信じてるんだろ？ 今頑張らないでいつ頑張るんだよ！」

峻一に叱咤され、沙夜にその時の気持ちは蘇ってきた。

過去の過ちの疵を抱え、乗り越えようとしているそんな颯を守っていきたくて誓った、あの互いの想いが通じた日の想いが。

守られたんじゃない。

守りたい。

いつの間にもその思いを忘れてしまっていたのだろう。

「ありがとう松岡くん。私が頑張らなきゃね。もう颯に心配かけちゃいけないよね」

（私が元気であること。それが颯の望んでいることなら、今の私はそれを叶えるしかないんだね）

それで颯の心が救われるなら、自分が堪えるしかない。

沙夜は苦しい思いで決心したのだった。

*

*

*

颯の停学から三日目を迎えていた。

颯は二学期初日から一度も姿を現していない。

担任の英語の授業を受けながら、沙夜は周りの空気の重圧を息苦しく感じていた。

ちらつと主不在の席を見る。

沙夜は今日まで何度も心の中で問いかけ続けていた。

彼がここにいないのに自分はなぜここにいるのか。なぜ自分だけいつもと同じ毎日を過ごしているのか。今、颯は家で一人何を考え、一日一日を送っているのだろうか　と。

(私が颯の居場所を奪っちゃったんだ)

胸に鈍い痛みが駆け抜ける。

沙夜は痛みと、背にかかる岩を乗せたような重みに押し潰されそうだった。

クラスどころか学校中に颯の停学が知れ渡ってしまった。しかもその原因が喧嘩だということも。

噂に噂を重ね、いつの間にか颯が相手に大怪我させたなんてことにもなってしまうていた。

しかしその件に沙夜が関係していたことは一切知られていない。

そのことがかえって沙夜に罪の意識を感じさせていた。

知られていないはずなのに、自分を見る人の視線が怖かった。侮蔑されている気がした。

お前も同罪なのになぜ学校に来てるのかと思われ、白い目で見られている気がした。

いつそのこと面と向かって言われた方がいいとさえ思った。

クラスの雰囲気は明らかに今までと違っている。

原因が喧嘩だと広まった時、生徒は口々に言った。

「やっぱり見かけ通り怖い人だったんだ」と。

颯がやつのことで心を開いて築き上げてきたクラスメイトとの関係が、あつという間に崩れ去った瞬間だった。

皆、颯が登校しても入学当時の態度でしか接しないだろう。

また築きなおせばいいなんて簡単なこと、沙夜には言えなかった。

一度壊れたものを作り直すことの難しさを誰よりも分かっているのは、颯自身なのだから。

ゼロからのスタートではない。マイナスからのスタートだ。

(そうさせてしまったのは……私！)

颯が自分をかばってくれたからだ。彼一人に罪を被らせてしまったからだ。

沙夜は授業中であることも忘れ、己を責め続けた。

やがて授業の終わりを告げるチャイムが響き渡った。

四時間目が終わり、昼休みに入る。

「和泉、お昼食べ終わったら職員室まで来なさい。話がある」

担任が教室を出ていく前、沙夜のところへ寄って来てそつと沙夜に声をかけた。

「……………はい」

沙夜は沈んだ声で一言返事した。

「沙夜、先生何だった？」

気遣うように峻一がやってきた。

「う、うん。何だろう…ね」

沙夜はとっさに分からないフリをした。

フリ。

そう。沙夜にはなぜ呼び出されたのか心当たりがあった。

休みあけ早々の課題テスト。

沙夜の答えは白紙も同然だったのだ。

夏休みの課題は全部やってあった。それしか気を紛らわせる手段が沙夜にはなかったからだ。

だがテストの時は違った。

颯の停学。クラスメートの態度、視線。心の重圧に、沙夜はテストを受けられるような状態ではなかったのだった。

沙夜はお弁当もそこに、早々に席を立った。

それを見た峻一が、男友達の輪から離れ駆け寄ってきた。

「職員室行くんだろ？俺も一緒に行こうか？」

一瞬迷う沙夜。でもこれは自分の招いたことなのだから……と首を横に振った。

「一人で大丈夫、だよ」

どこか心細そうな沙夜の様子に、峻一は本当に大丈夫なのかと疑問に思ったが、ついていくのを思い止まる。

「じゃ、五時間目に遅れるなよ」

「うん」

沙夜はそう言って、教室を出て職員室へ向かった。

足取りは重かった。沙夜の心と同じように。

職員室に着くと、沙夜は真っ直ぐ担任の机に足を進めた。

「先生、あの……」

か細い沙夜の声に気づいた担任は、お茶を飲んでいる手を止め、湯のみを置き、沙夜に向き直った。

「来たか」

言っと担任はファイルを一つ手にして立ち上がる。

「今、隣の応接室空いてますよね？」

隣の学年主任に確認を取ると、担任は沙夜を促し応接室へ連れていった。

担任は入るとそのままソファーに座った。

沙夜はドアから二、三步進んだところで躊躇いがちに立ち尽くしていた。

「和泉も座りなさい」

促され、沙夜は担任と向き合う位置におずおずと腰を下ろす。

「呼んだのは他でもない。この前の課題テストの結果のことだ」

前置きもなく、ストレートに担任は言ってきた。

沙夜は心の中で「やっぱり……」とうな垂れる。

担任はテストをテーブルの上に広げた。

「これなんだが他の先生方も心配していたぞ。和泉の成績なら平均点は取れるはずなのに、平均点どころかどの教科も一桁しか取れていないじゃないか。何か悩みでもあるのかと気になって、こうして来てもらったんだよ」

諭すような担任の言葉に、沙夜は膝に置いた手でスカートをギュッと握る。

(私の悩み。……悩みは)

頭の中に色々な光景がフラッシュバックのように駆け巡った。

胸は様々な思いで締め付けられる。

俯いた沙夜の瞳からは、大粒の涙が雫となって手の甲を濡らした。

「先生。……私も停学にしてください」

沙夜は自分でも無意識のうちに口を開いていた。

「……和泉？」

言葉の意味を理解できず、担任は怪訝そうな顔をした。

沙夜はなおも続ける。

「颯が……、本多くんが喧嘩して停学になったのは私のせいなのに、私だけ何もなかったように普通に生活するなんて、やっぱりできない。そんな自分が許せないんです」

沙夜の言葉を聞いた担任は机の上に広げたテスト用紙をファイルにしまった。

「そうか」

その一言は何かを納得した響きだった。

「警察から女の子をかばって喧嘩して怪我をしたとは聞いていたよ。けれど本多に聞いてもそれが誰なのか、絶対に言おうとしなかった。和泉が本多と付き合ってるとは聞いていたが、まさかかばった女の子が和泉だったとは……な」

担任の言葉を聞いて、沙夜は口を手で覆った。

しかしなお、嗚咽を押さえることができなかった。

（颯が私を守ってくれてたんだ）

停学の原因が喧嘩だと知れ渡っても、自分が関わっていたと広まらなかったのは、颯が決してその名を告げなかったからだ。今夜は知らされたのだ。

(離れてても、颯は私を大切に想ってくれてる)

颯の想いを感じて、沙夜は溢れる涙を止めることはできなかった。

(なのに私は何も颯にしてあげられない。颯の立場を苦しめてばかりいる)

だからこそ、せめて同じ苦しみを与えて欲しかった。停学という名の罰を。

「先生……、私を罰して下さい。本多くんは決して自分のことで相手を殴ったりしてないんです。私をかばったからこんなことに……。だから本多くんが停学なら、私も同罪なんです。お願いします」

深々と頭を下げる沙夜に、担任はしばらく黙っていた。

やがて重い口を開く。

「和泉、それはできないんだ」

担任の言葉を聞いたとたん、沙夜は反射的に顔を上げた。

「確かにこの程度のことだったら普通なら注意で済んだのだろう。だが、本多の場合はちょっとそれだけでは済まされることがあつてな」

担任の言いたいことが沙夜には分かった。

自分はごく普通の平凡な一生徒。

颯は過去に過ちを起こした、問題視されている生徒。

自分と颯との間に境界線が引かれた気がした。

「それは本多くんが少年院にいたから……ですよね？」

ポツリと沙夜は咳くように言った。

「知っていたのか？」

担任は驚いた。

沙夜が颯と付き合っていると聞いた時も驚いたが、まさか彼の過去まで知っているとは思ってもみなかった。

再び沙夜は俯いた。

「はい、全部聞きました。過去に何があったのか……。それでも一緒にいたいと思ったんです。立ち直ろうと頑張っている彼の傍にいたかったんです。……先生、私今回の処分に対して学校を恨んでるわけじゃないんです。本多くんも退学を覚悟しても、学校を責める気はないって言ってました。問題を起こしたら退学だって言われたのに、停学に留まってくれた学校側にはありがたく思っています。ただ自分が許せないんです。彼一人に全部押し付けて、自分が今までと何も変わらず生活してるのが苦しいんです」

もう沙夜には自分がどうすべきなのか分からなかった。

自分を見失いかけていた。

停学にされなくても、学校を休みたい。休もうという考えさえ、頭の中をよぎっていた。

「和泉、本多がなぜお前のことを話さなかったのか、よく考えるんだ。お前が自分も停学にしてくれなんて言ったら、本多が悲しむぞ。お前が元気に生活することが、本多の気持ちに報いることになるんじゃないのか？　こんなテスト結果、本多が知ったら嘆くだけだぞ。頑張りなさい」

担任はなんとか沙夜を力づけてやりたいと思った。

真面目な分、思い込んだらどんどん自分を傷つけていきそうな沙夜を思い留まらせたかった。

その時、昼休みの終わりを告げるチャイムが校舎中に鳴り響いた。

「……教室へ戻りなさい、と言いたいところだが、その泣きはらした目が落ち着くまで、とりあえず保健室にでも行って休んでなさい。今はまだ授業を受けられる気分じゃないだろうしな」

担任はそう言って席を立った。

応接室から出ていく時、担任は振り返って再び口を開く。

「また何かあったらいつでも話聞くから、一人で悩まず相談するよ
うに。いいな？」

「……はい」

沙夜は担任の気持ちをありがたく思い領いた。

担任が出ていくのに続いて、沙夜も応接室を後にする。

そのまま職員室を出て、担任の言う通り保健室に行こうとしたら、職員室を出たところで峻一が沙夜を待ち構えていた。やっぱり沙夜のことばかりだったのだ。

「何があつたんだ、沙夜!？」

泣きはらした赤い瞳を見て、峻一は驚いた。

沙夜は何も言えず、無言で首を横に振る。

峻一の心配する気持ちは、一気に最高潮に達した。

「先生に叱られたの?」

峻一は顔を覗き込むが、沙夜は目を合わせず再び首を振った。

「じゃあどうして……?」

訳が分からず、峻一は戸惑う。

「私、次の授業休むね。先生に言っといてくれる?」

「お前、どうするんだ?」

「保健室に行く。先生がそこで休んでなさいって言ってくれたから

……」

ただならぬ沙夜の様子に、峻一はこのまま沙夜を一人放っておくことはできなかった。

「俺も一緒に行くよ」

夏休みから今までだって、沙夜は元気なかった。

颯の停学を知ってからにはなおさら沈んでいた。

だが、目をはらすほど泣いた姿を峻一に見せたことはなかったのだ。

「一人で大丈夫だよ」

峻一にこれ以上心配はかけられないと思った沙夜は言った。

しかし、今沙夜を一人にはできないと峻一は思った。

こんな姿の沙夜を見ておいて、授業なんて受けてる場合じゃないと思った。

「俺も行く。お前が何と言っても」

峻一は沙夜に有無を言わず、沙夜の肩を抱いて保健室へ連れて行った。

着いたが、保健医はいにく部屋にはいなかった。

峻一はとりあえず沙夜をベッドに寝かせると、その脇に椅子を持

ってきて自分も座った。

「気分が悪かったりはしない？」

「うん。大丈夫」

沙夜は深く一度呼吸した後答えた。

しばらくの沈黙の後、峻一が沙夜を気遣いながら口を開く。

「沙夜。……泣いてたわけ、聞いてもいいかな？」

その一言に、沙夜の表情が一瞬固まる。

それを見た峻一は戸惑う。

「無理に話さなくていいから」

言いかけた時、沙夜の瞳からまた涙が零れ落ちたのを見て、峻一は椅子から立ちあがり沙夜の顔を見つめた。

「沙夜、俺を頼ってよ！」

沙夜の心が壊れそうで、何とか助けたくて峻一は言った。

峻一の思いが、沙夜の胸に染みた。

(いつだって松岡くんは私を助けてくれる。松岡くんを好きになっ
てたら、こんな苦しい思いしないで済んだかもしれないのに)

それでもやっぱり、沙夜の心は颯への想いが溢れる。

人を愛する思いの強さが、沙夜を苦しめる。

「……私も停学だったらよかったのに。颯と同じように罰して欲しかったの。学校に来てても、授業もテストも何も考えられなくて、先生にはそれを言われただけ」

「お前、まさか自分も停学にしてくれなんて言ってないよな？」

「……………言った」

峻一はガクリと力を落とし、椅子に崩れるように座った。

「お前、それが本多を苦しませるだけだって分かってないのか！？俺が本多の立場だったら、たとえ自分がどうなろうと沙夜を一番に守るよ。お前が笑顔で過ごせるなら何だってする。それが俺にとって誇りでもあるんだ」

峻一は何とか沙夜に分かって欲しかった。

愛するからこそ守りたいという、本多の想いを。

「守られてるからこそ苦しいの。一緒に背負っていきたくった。でも颯には逆にそれが負担になってしまうのが分かってるの。でも……私も辛い」

沙夜の言葉を聞いて峻一は思った。

こんなにもお互いのことを大切にしてい、自分を苦しめてる恋人同

士が他にいるだろうか……と。

そして沙夜はその苦しみに堪えられなくなっているのだ。

いつ解消されるか分からない苦しみ。その苦しみを和らげてやれるのは、もはや颯にしかできないことなのだ。と峻一は痛感した。

再び沙夜の隣に颯が並んで立つこと。それしか沙夜を救ってやれないのかもしれない……と。

峻一は立ち上がり、なだめるように沙夜の髪を撫でる。

「沙夜、今は頑張って堪えよう。本多も頑張ってるんだ。一緒に頑張ってるんだって思ったら、少しは堪えられるだろう？」

峻一は言っていて、こんな言葉では沙夜を力づけてやれないと思っ

た。
そんな峻一の懸命に自分を励ましてくれる姿に沙夜は感謝し、小さく頷くのだった。

*

*

*

ピンポーン！

峻一はその日の学校帰り、沙夜を家まで送り届けた後、一軒家のインターホンを押した。

「……………どうしてお前が？」

しばらく後、インターホンから意外そうな男の声が返ってきた。

「話がある。出てきてくれないか？」

「……………分かった。すぐ行く」

インターホンの切れる音がして約一分後、玄関が開き、颯が姿を現した。

門を開け、峻一を迎え入れようとする。

「……いいよ」

峻一は颯を引き止める。

颯は峻一の目をじっと見た後、峻一のただならぬ覚悟を感じて、自分も門の外に出て、後ろ手で門を閉めた。

颯は俯き、ずっと気がかりだったことを口にする。

「沙夜は……………元気か？」

「何とか学校には来てるよ。……………元気には程遠いけどな」

「……………そう……………か」

颯は低い声で自分に納得させるかのように呟いた。

峻一はそんな颯の様子を見て、彼もまた沙夜と同じように相手のことを想って心を痛めているのだと知る。想いの強さに比例するか

のよつじ。

「沙夜とよりを戻すつもりはないのか？」

「戻りたくても……戻れない」

「今、沙夜を救えるのがお前だけだとしても、か？」

「……………ああ」

峻一は颯の心が葛藤しているのが分かった。

「それはお前が少年院に入ったようなヤツだからなのか？」

颯は少年院と聞いて目を見開いた。

「それ、……………沙夜が話したのか？」

颯は自分が少年院に入っていたことを、沙夜が簡単に人に言ったりしないと思っていた。言わざるを得ないくらい、沙夜が苦しんでいるのかもしれないと思った。

「いや逆だ。俺が人から聞いたことを沙夜に話したんだ。まあその後本当のことは沙夜から聞いたよ。付き合い始めた時も、別れた理由も聞いた」

「じゃあ俺が沙夜と付き合えない理由も知ってるんだろ？」

苦い思いで颯は峻一に言った。

そんな颯に、峻一はあえてもう一度聞く。

「知ってる。本当にもう元には戻れないのか？ 諦められるのか？ 忘れられるのか？」

颯の表情が苦痛に歪む。

その瞳には溢れ出る沙夜への想いが見て取れた。

「お前に分かるか！？ 自分の過ちのせいであいつを危険に巻き込むかもしれない恐怖が！！ 俺だって手放したくなんかなかった。後にも先にも命を懸けてもいいと思うくらい大切な人はあいつ以外いない！」

感情をあらわにした颯に峻一は少々驚いたが、なおも颯に詰め寄る。

「守りぬく自信ないのか？」

「俺はどうなつてもあいつを守るつもりだった。けど、いくら俺が喧嘩慣れしてるからって、大勢でこられたら俺だってあいつを無傷で守り抜けないさ。俺の傍にいないことこそがあいつの安全なんだ」

荒げた声は、まるで自分に言い聞かせるようだった。

何度後悔しただろう。過去の過ちを。

何度思っただろう。沙夜ともっと早く出逢えていたらと。

その度に思い知る。

自分に押された烙印の重さを　　。

「身の安全は守っても、あいつの気持ちはどうするんだよ。今、あいつが学校でどう過ごしてるか知ってるか？　心細そうに、まるで周りに脅えるように、一人でお前のことばかり考えて苦しんでる。そんなあいつをこのまま放っておくのか!？」

男の立場として、颯の気持ちも分からないではなかった。

だが沙夜の姿を目の当たりにした峻一は、ただ沙夜を助けたかった。

「あいつ、今日先生に自分も停学にしてくれって言ったんだ」

峻一のこの一言に、颯は衝撃を受けた。

「本当……か？」

「……………ああ」

颯は額に手を当て、俯いた。

「あいつ、ずっと堪えてたよ。お前の気持ちを考えてちゃんと学校にも来てた。それでも言わずにいられないくらい追い詰められてたんだ。別れた現実があいつを追いこんでるんだよ。お前があいつの心を殺してるんだ。それが分からないのか!？　俺じゃダメなんだよ。悔しいけど、今あいつの心を救えるのはお前だけなんだよ!！」

峻一は颯の肩を強く掴んで揺すった。

(俺が沙夜の心を……殺してる?)

颯は心の中で繰り返した。

別れることが沙夜の安全だと思った。だからこそ、どんなに辛くても自分の心を押し殺し、その手を離れた。

だが今度はそのことで沙夜の心を殺しているのかと、颯は愕然とした。

(俺はどうしたらいいんだ?)

すぐには答えが出せない。

「本多、頼む。沙夜の心を助けてくれ。このままじゃあいつの心、壊れちまうよ」

峻一の悲愴な呟きが、颯の胸に突き刺さる。

(あいつの身も心も守るには、俺はどうしたらいいんだろうか)

「松岡、少し時間をくれ。よく考えて頭ん中整理して、きちんと答えを出したいんだ」

颯の迷いが峻一にもよく分かった。

すぐ答えを出せという方が無理なのかもしれない。

別れることだって一大決心だったはずだ。よりを戻すにしても、このままだとしても、改めて固い決意が必要だろうと思った。

「分かった。お前が戻ってくれることを信じて待つ。今日は帰るよ」

峻一は颯の出す答えが自分の期待する答えと同じであるように…
…と思いながら、その場を後にした。

残された颯は、峻一の言葉を思い返していた。

(俺は沙夜を苦しめる存在でしかないのか!?)

自分の不甲斐なさに、颯は拳を壁に叩きつけた。

そしてそのまま壁に寄りかかる。握ったままの拳は震えていた。

(俺は沙夜に何かしてやれるんだろうか?)

颯は空を見上げた。

心の中には沙夜の泣き顔が浮かんでいた。

颯はずっと長い時間、その場にたたずんでいた。

*

*

*

「沙夜、明日学校来るよな?」

帰宅途中の電車の中で、不安げに峻一が尋ねた。

「……………うん」

迷いを含んだ沙夜の返事が返ってきた。

行きたい。行きたくない。……………行かなければ。

そんな思いが渦巻く。

明日は颯の停学が解ける日。

颯が登校してくる。

あの夏の別れ以来、颯と顔を合わせるのだ。

颯が学校へ戻ってくる姿を見たい。

しかしどんな顔をして会えばいいのか、今だに分からない。かといって休んだりしたら、それこそ颯に心配をかけてしまう。

沙夜は心と体がバラバラになってしまう気がした。

そんな沙夜を、峻一が隣で気遣う瞳で見ている。

(……………本多は答えを出したんだろうか?)

あの日以来、峻一も颯に会ってはいなかった。

颯からの連絡は一度とてない。

本当にこのまま沙夜と戻らないつもりなのだろうか……………という不

安がよぎる。

停学が解けたといっても、学校での颯への風当たりは想像できた。

それを同じクラスで見続けなければならぬ沙夜の心を思うと、峻一の胸は痛む。

きつと己を責め続けて苦しむだろう彼女の心が心配でならなかった。

できる限り、沙夜の支えになろうとは心に決めている。

だが、本当の意味で彼女を救えはしないことも知っていた。

救えるのはただ一人。

本多颯だけなのだ。

彼が沙夜の傍にいて、彼女の心の疵は癒えるだろう。

周りの言葉や態度で、これからも苦しんだり疵ついたりするだろう。

でも隣に想いを寄せる人がいれば、それだけで心強い支えとなるのだ。

互いの疵を癒すことができるのだ。

(本多、……戻って来いよ)

峻一は切実に心の中で呟いた。

峻一は今でも沙夜が好きだった。

好きだからこそ、彼女のために何かしたかった。自分が彼女に大したことがしてやれないからこそ、なおさらに思った。

彼女の幸せのためだったら、自分の想いが通じないことなどどうでもいいとさえ思えたのだ。

二人はそれからずっと無言だった。

やがて電車は二人の地元の駅に到着した。

何を話しているのかわからず、ただ周りの声がザワザワと二人の耳に届く。

無言のまま、二人は改札を出た。

数歩足を進めた時、沙夜が急に立ち止まった。いや立ち尽くしたのだ。

「……………沙夜？」

一点を見つめ息を止める沙夜に、峻一は戸惑い、沙夜が見つめる先に視線を移す。

（あっ！）

峻一も目を大きくした。

その時二人の視線の先にいる人影が、柱からもたれた体を起こしこちらをじっと見つめた。

(あ、足が動かない)

その人影が誰なのか悟った沙夜の体は硬直した。

どうして彼がここにいるのだろうか。

彼に何を言えればいいのだろうか。

沙夜の頭の中は混乱した。

初めは彼がそこにいることが信じられなかった峻一も、こちらを見つめてくる彼の瞳が自分の願う決意を湛えているのを感じ安堵する。

「沙夜、行ってこいよ」

峻一は沙夜の背中を優しく押した。

沙夜は戸惑い、不安を隠し切れずに振り返り、峻一を仰ぐ。

「ちゃんと自分の気持ち、本多にぶつけてきな」

「……松岡くん」

微笑んで自分に語りかけた峻一を見て、沙夜は後戻りできそうにない雰囲気躊躇した。

峻一はもう一度颯をじっと見た。

颯も峻一を見て、深く一度頷く。

沙夜を颯に任せようと、峻一は沙夜の肩を掴み、彼女を颯の方へ向かせ前にそっと押し出した。

「本多のところへ行きなよ」

言っとそのまま自分は駅の出口へ歩み出した。

取り残された沙夜は、颯を見つめながらもどうしていいか分からず、ただ鞆を持つ手に力が入るばかり。

鼓動がやけに大きく聞こえる気がする。

(どうしよう。颯に何を言えばいいの?)

硬直した手が微かに震えた。

一步も踏み出せないでいる沙夜のもとへ、颯がしっかりとした足取りで歩み寄ってきた。

颯の表情は何かを吹っ切ったように、清々しさを漂わせていた。

「沙夜」

久しぶりに聞く颯の自分の名を呼ぶ優しい声に、沙夜の心に愛しさが込み上げた。

「急に会いに来て驚かせてごめんな。でもどうしても明日学校で会う前に、沙夜に伝えたかったんだ」

前と変わらない颯の声の響き。

沙夜の胸は恋しさで締め付けられる。

ずっとどんな顔して颯に会えばいいのか分からなかった。

だが今こうして彼を目の前にして、真っ先に感じたのは颯への愛だった。

「ずいぶん辛い思いさせてしまったんだな。本当にごめんな」

颯は自責の念を湛えた瞳で沙夜を見つめ、そっと彼女の髪を撫でた。

沙夜の瞳に涙が滲む。

「うっん。……私こそごめんなさい」

首を振ると、涙が一筋頬を伝って流れ落ちた。

沙夜の胸の内を、颯は痛いほど感じていた。

沙夜を守るつもりでしたが、自分が停学になったことで彼女を苦しめていた。

思いあがっていたことに気づいたのだ。

自分がどうなるかと彼女さえ守ればと。

守ったつもりだった。

しかしそれは自分の独り善がりの考えにすぎなかった。

その結果が自分も停学にして欲しいと言った彼女の言葉であり、この彼女の涙なのだ。

「……………沙夜」

颯は切なく彼女の名を呼び、彼女の頭を自分の胸に引き寄せた。

沙夜は颯の温もりを感じ、その胸にしがみつく。

「……………颯、……………颯」

沙夜は夢中で名前を呼んだ。

辛かった思いをこの温もりが消し去っていく。

そんな沙夜の頭を、颯は愛しそうに撫でていた。

駅には次の電車が到着し、乗客達が次々に電車から降り、改札口に向かってきていた。

それに気づいた颯は、沙夜の肩を抱きその場を離れる。

駅から出て、その壁の裏側の人通りの少ない所へ移動した。

その間も、沙夜は颯にしがみついた手をその胸から離そうとしな
い。

離してしまったら、颯とは一人の友人という関係に戻らなければ
ならないと思っていたからだ。

今はまだ颯の温もりを離したくはなかった。離れた時、心にまた
苦悩が蘇ってきそうに怖かった。

「沙夜、俺のわがまま聞いて欲しい」

颯は沙夜を抱く腕を解き、頬に触れ、その涙が光る瞳を見つめた。

「わが……まま？」

不思議そうに沙夜は聞き返した。

颯は大きく頷く。

迷いのない真っ直ぐな瞳に、沙夜はその瞳に吸い込まれた。

颯は、まだ自分の胸の服をギュッと握っていた沙夜の手を掴んだ。

「俺と一緒にいて欲しい。戻ってきて欲しいんだ、沙夜」

沙夜は息を飲み、目を見開いた。

一瞬彼の言葉の意味が分からなかった。

自分の都合のいいように、そう聞こえたただけだと思った。

(…………元に戻るの？ 颯の隣にいていいの？)

沙夜は口を開くが、何も言葉にならない。

「苦しみも悲しみも…………喜びも、一緒に分かち合っていきたい」

颯は峻一と話をした時から、ずっと考えてきた。

どうすれば沙夜のためになるのか。

何か彼女の心も体も救える方法はないのだろうか。

そして自分はどうすべきなのか。

何も手につかないほど、毎日同じことを繰り返し考え、悩み抜いた。

そしてある時、ふと思ったのだ。

自分が沙夜の立場に立った時、どうして欲しいと思っただろうか、と。

相手にすべてを背負わせて、平静でいられるわけがなかったのだ。

背負わせた分、自分の身を挺して守った分、彼女はその重さに苦しんでいた。

もし自分が沙夜だったら。

守って欲しかったんじゃない。

共にその苦しみを分かち合い、二人で乗り越えていきたい。たとえそのために自分の身が傷ついたとしても。

中川が沙夜と自分に言ったことを、颯は思い出した。

起こってしまったことを悔むよりも、二人でそれをどう乗り越えていくか考えていつて欲しいと。

自分の心を大切に思うことも、おざなりにしてはいけなないと。

そしてその言葉で颯は気づいた。

自分達はお互い相手のためと思って、相手に迷惑はかけまいと、負担にはなるまいと、自分の心を閉じ込めようとしてきた。

しかしそうではなかったのだ。

本当に相手のことを思って気持ちを考えていれば、自分の心を殺すことはなかったのだ。

自分の想いを大切にしてこそ、相手のその本当の想いを知ることができるし、どうして欲しいかも感じる事ができるのだ。

その時颯はやっと自分の心を見つめ直し、自分の考え、行動が浅はかだったことに気がついた。

離れお互いを想い悩み苦しむなら、共にいてその苦しみに立ち向

かっつていっつ。

颯は数日かけてようやくその決意に辿りついた。

「沙夜。俺はもし何かあった時、お前を命懸けで守るだろう。お前を傷つけてしまつかもしれない。だけどもう迷わないし、恐れない。俺はお前を巻き込むことにしたよ」

颯は目を細め、微笑んだ。

漆黒の闇を湛えた瞳が、その呪縛から解き放たれたように光った。

沙夜は震える唇を噛み締める。

だが堪えきれずに涙は溢れ、颯に抱きつき、その背中にギュッと手を回した。

「……………」

何も言葉にならない。

（颯が戻ってきてくれた！）

嬉しかった。

颯とまた一緒にいられることが。

そして颯が自分を認め、己の抱えるものを一緒に背負い、乗り越えていこうと思ってくれたことが。

「沙夜ももう一人で苦しむな。俺は沙夜に辛い思いをさせると思う。だから沙夜も、沙夜の苦しみを俺に分けて欲しい。二人ならきつとそんな思いにも立ち向かって乗り越えていくことができると思うから」

沙夜は颯の言葉に、彼の胸の中で何度も頷いた。

一人では堪えられなかった苦しみも、二人一緒なら頑張れると思っただ。

もう心細さはなかった。

「沙夜……」

颯の愛おしそうな声に、沙夜は彼を見上げた。

彼の穏かな顔に、沙夜も頬が弛み、自然と笑顔が浮かんだ。

「もう二度と、決して離さない」

「私も……もう離れないよ」

二人はどちらからともなく唇を重ねた。

以前のような悲愴に満ちた思いはなかった。

とても満ち足りた、前向きな思いがそこにはあった。

(8)

翌日、二人は一緒に登校した。

クラスメートの反応は、やはり入学当時のように距離をおいたものだった。

だが二人はそこで落胆はしなかった。

想像できたことだったし、どんなに困難でももう一度やり直そうと決意を固めていたからだ。

今はまだ遠巻きにしか自分たちに関わろうとしないクラスメートだが、いつかきつと面と向かって笑いあえる日が来ることに、二人は希望を持っていた。

そしてクラスメートである峻一は、二人とクラスメートとのパイプラインとなって二人を助けていた。

その存在に、颯も沙夜も峻一には心から感謝していた。

分かりあえる日が来ることを願って、二人は互いが互いを支えるように、肩を寄せ合うように、物静かにひっそりとクラスの中に存在していた。

その日の夜。

「しゅちそうさま」

沙夜は夕食を食べ終え、いつものように食器を流し台まで運ぼうと椅子から立ちあがった。

そして母親と共にテーブルの上を片づけ、食器を洗い、その後自分の部屋へ行こうとした。

「沙夜、話がある。座りなさい」

父親が何を話そうとしているのか分からず、沙夜は戸惑いながら再び椅子に腰を下ろした。

何か重苦しい空気が漂っていた。

(お父さんの話ってなんだろう)

嫌な予感がする。

「これはどういうことだ？」

父親はテーブルの上に一枚の紙を広げて置いた。

(……あっ！)

それを目にした沙夜は肩をすぼめる。

課題テストの結果とその順位が印字された用紙。

それは沙夜が、つい自分の机の上に出したままにしたものだった。

「お母さんがお前の部屋の布団を干しに行った時見つけたそうだ。」

なにも上位の優秀な成績を取れって言うんじゃない。だがいくらなんでもこれはひどすぎる」

テスト五科目。そのどれもがはつきりいって最下位も同然だったのだ。

さすがに沙夜もこれを両親には見せずらかった。どうしようか迷っているうちに、そのまま机の上に置きっぱなしにしまったのだった。

「お母さんな、生活指導の先生に呼ばれて今日学校へ行ったんだぞ」
その言葉に沙夜は、向かいの父親の隣に座る母親を大きな目で見つめた。

沙夜の部屋でテスト結果を見た母親は信じられず戸惑い、そして自分の娘に何かあったのではないかと不安になった。

確かにこのところ元気はなかった。だが家ではこれといったことも浮かばない。

学校で何かあったのだろうか。いじめにあつてたりするのではないか。

色々な考えが巡る中、次の日学校から連絡がタイミングよく、いや悪くというべきか、入ったのだった。

散々たるテストの結果を知った生活指導の先生が、一体どんな夏休みを過ごしたのか親に確かめようとしたのだ。

しかしこの夏休みの間に沙夜に起こったことを母親は知るはずもなかった。

沙夜は峻一と萌子以外に颯のことを話してはいなかったのだ。

両親にさえも、付き合っている人がいたことも、颯という存在もまだ知らせてはいなかった。

何も訳が分からず、母親は生活指導の先生と会った後、そのまま沙夜の担任の先生なら何か知っているのではないかと思い、担任と話をしたのだった。

*

*

*

生徒相談室で、沙夜の母親と担任は話をすることになった。

「先生、娘は学校で上手くいってないんでしょうか……？」

不安そうに担任に尋ねる母親。

そんな母親の様子に担任は無理もないか、と思う。

今までだったらありえないテストの結果。そして学校からの呼び出し。

何不自由なく平凡に生活を送っていたはずの娘には考えられないことだったに違いない。

そして娘の沙夜はおそらく自分の身の上で起こったことを、家族には話してはいないのだろうと思った。

「和泉さん。上手くいってるとかではなく、沙夜さんがこのところ悩んでいたのは確かです。ちょうど時期がテストと重なって、正直テストどころではなかったのでしょうか。」

「悩み……ですか？」

「そうです。」

娘の悩みに皆目見当がつかない。

「先生はご存知なんですか？」

「ええ。テストの結果があれでしたので個人的に面談したんですが、その時話してくれました。」

「……で、何と。」

「沙夜さんがとある男子生徒と付き合ってること知ってますか？」

「……えっ!?!？」

一瞬母親は我が耳を疑った。

奥手だと思っていた娘に付き合っている男の子がいるなど、思ってもみなかったのだ。

母親は娘の近くにいた異性を思い出そうと頭を巡らせる。

「それはひょっとして、……松岡くんですか？」

同じ中学だったし、このところよく家まで迎えに来ていたのを時々母親は見ていた。

夏休みもよく一緒に出かけているようだったことにも思い当たる。

だがもし仮に彼と付き合っていたとしても、それでどうして悩むことになるのか分からなかった。

「いえ。仲はいいけど彼ではありません。相手は同じクラスメートの本多颯という生徒です」

担任の言葉に母親は顔をしかめた。

一度も聞いたことのない名前に、どんな人物なのか想像する。

娘を悩ます男の子に好感は持てなかった。

「その生徒が夏休み中にちょっと喧嘩して、この前まで一週間停学になってたんですが」

「停学!？」

担任の言葉に、母親はますます本多颯という男子への不信感を募らせた。

「正確には喧嘩に巻き込まれて、沙夜さんを守って大怪我したという事です。沙夜さんはそのことでずいぶん責任を感じていました。怪我を負わせたのも、停学になったのも自分のせいだと、自分も停学にして欲しいと言うほどまでに悩んでいました」

母親は思う。

娘は優しい子だ。だからこそ、相手の痛みを見て見ぬ振りなどで
きず、思い悩んだのだからと。

「先生、ちょっと待って下さい。喧嘩に巻き込まれただけで停学な
んですか？ こちらに非がなくても、それじゃあ厳しいんじゃない
ですか？」

そもそも停学なんてことにならなければ、娘もこんなに苦しむこ
とはなかったのではないかと疑問に思った母親は尋ねた。

担任は少し口ごもった。

颯の過去を言うべきかどうか迷ったのだ。

娘と付き合っている相手のことを親が知るのは、親の権利なのか
もしれない。

だが、本人達の口から言うのが筋かもしれない。

「本多のプライバシーにも関わることなので詳しくは言えませんが、
彼は過去に色々ありまして、普通より厳しく処分したのです」

「過去に色々って。娘はそんな男の子と付き合ってるんですか!？」

その色々は決していることではない。

母親は愕然とした。

うちの子にかぎって……とはこのことなのだろうか。

「今は何事もない、普通の生徒です」

「今はって……。娘は彼の過去の色々とやらを知ってて付き合ってるんですか？」

「もちろん承知してます」

母親は何も言えなくなってしまった。

頭の中はパニック状態である。

娘がそんな男の子と付き合っているなんて信じられなかった。

もし本当に付き合っているのだとしたら、思い込みの激しい若気のいたりなのではないかと思った。

そんな付き合い、やめさせなくては。

ただそんな思いだけは、はっきり胸の内に刻まれていた。

「和泉さん。あの子達はあの子達なりに懸命に考えて付き合ってるのだろうと思います。娘さんを心配するお気持ちはよく分かりますが、どうか二人を長い目で見てやって頂けないでしょうか？」

ショックを隠しきれないでいる母親を前にして、担任は二人のこれからの思い言った。

このまま何事もなく過ぎていけばいいのだが……という不安な思いが胸をよぎる。

そしてそれは現実となつて、沙夜と颯に襲いかかるうとしていた。

*

*

*

「沙夜。あなたが付き合っているっていう本多くんって、どんな男の子なの？」

今度は母親が聞いてきた。

目の前に座る両親の視線は、沙夜の心に恐怖心を与えた。

「年頃の女の子なんだ。異性と付き合うなど言ってるんじゃない。ただ親にも言えないような相手なのか？ お前にテストでこんな点を取らせるなんてどんなヤツなんだ？ なんでも喧嘩して停学になるような男だそうだな」

父親の口ぶりは、颯を認めてくれそうにはないものだった。

「喧嘩して停学になったのは、私をかばってくれたからなの。テストも颯のせいじゃない。私がテストに集中できなかったから……」

沙夜はこれ以上颯のことを悪く言われたくはなかった。

「今日、担任の先生ともお話ししてきたの。普通は喧嘩くらいじゃ停学にならないそうよ。本多くんは過去に色々あったから、処罰を重くされたってね。先生はプライバシーに関わるからって教えてくれなかったけれど、本当は本多くん、過去に何があったの？」

母親の口調は穏かだった。しかし有無を言わせない響きがあった。それでも沙夜は真実を言うのを躊躇った。

彼の過去を話したら、きっと付き合っつのを反対される。

(お父さんもお母さんも、きっと今の彼を見ようとはしない。過去の彼の姿しか目に入らない)

多くの人間と同じように、冷やかな視線を向け拒絶するだろうと直感した。

中川のような人間の方が稀なのだ。

(やっぱり言えない！)

沙夜は俯いた。

「沙夜、言いなさい！」

父親のきつい叱咤の声が家中に響いた。

「言えないような男なら付き合っつな！！！」

沙夜は唇を噛み締めた。

そして震える声で絞り出すように言う。

「本当のこと言っても言わなくても、反対するんでしょ……」

「沙夜っ！」

両親の態度に、やり切れなさを感じた沙夜の瞳には涙が浮かんでいた。

同じことならもう言ってしまうおう。

沙夜は俯いたまま、震える両の拳を握った。

「……………少年院」

「……………え？」

ポツリと言った沙夜の言葉を、訝しげに聞き返す両親。

沙夜は涙を零しながら、今度はやり場のない思いで叫ぶ。

「颯は少年院にいたのよ！」

両親は目を大きくして互いを見た。

沙夜の一言は、二人に明らかに衝撃を与えた。

「そんな危険な男とは別れなさい！」

父親が我に返って沙夜に言った。

（危険？ ……危険って颯のどこが？）

自分の両親もまたその他大勢の人間と同じ反応だったことに、沙夜は虚しさと憤りを感じた。

「別れない。颯は必死で立ち直ろうとしてるの。颯が少年院に入ったのだって、元はといえば親が親の責任を放棄したからなの。どうして颯ばかりが責められて辛い思いをしなきゃいけないの？ 何もかも諦めなきゃいけないの？ お父さんもお母さんも、どうして今の彼を見ようとはしてくれないの!？」

言い終えたとたん、沙夜の頬に痛みが走った。

父親の平手打ちが飛んできたのだ。

口答えしたことの無い娘にはむかわれ、思わず手が出たのだった。

沙夜はぶたれた頬を押さえ、唇を噛み締めた。

(お父さんもお母さんも分かってはくれない!)

涙が後から後から溢れてくる。

沙夜は堪えきれず部屋から飛び出し、自分の部屋へ駆け込んだ。

やり切れない思いを胸に抱え、沙夜はひたすら泣き続けたのだった。

*

*

*

次の日の朝。

沙夜は両親となるべく顔を合わせないようにして、学校へ行く支度をしていた。

父親とは結局一言も言葉を交わすことなく、彼は会社へ出勤していった。

沙夜も学校へ行くため家を出ようとした。

「沙夜、待ちなさい」

母親が玄関まで追いかけてくる。

昨日の今日で、気まずい雰囲気の流れていた。

沙夜は振り返るが、言葉もなく、母親の顔すら真っ直ぐに見れなかった。

「今日からお母さんが学校の送り迎えするから。お父さんと相談して決めたのよ」

「……ど、どうして急に」

沙夜は母親の言葉の意味を察知して動揺した。

「あの男の子との関わりを減らしたいのよ。帰りも下校時刻前には学校へ行ってるから、終わったらすぐ出てくるのよ。もちろん休み時間とかに話すのも禁止よ」

「そんなの勝手に決めないで！」

両親の横暴さに、沙夜は怒りを覚えた。

(別れないって言ったから、こんな強引なことするの!?)

「もし破ったりしたら転校させるとまでお父さん考えてるのよ」

母親の一言に、沙夜は愕然とする。

そんなにまでして、自分たちの仲を引き裂こうとする両親の愛情を疑った。

今まで親は頼りになる尊敬する存在だった。

しかし今回のことで、沙夜はその心を切り裂かれてしまった。

それでも沙夜は両親に従うしかなかった。

転校でもさせられてしまったら、颯と本当に逢えなくなってしまう。離れ離れになってしまう。

あの夏休みに味わった胸の潰れるような悲しみをもう二度と宿らせたくはなかった。

何より颯の姿すら目にできなくなってしまう。

今のままなら少なくとも同じクラスにいられる。多少話もできるはず。

親の気持ちがおさまるまでは、我慢するしかないと思った。

「分かった。それでお父さんもお母さんも納得するならそうする」
沙夜は両親に折れた。

しかしさらに母親の告げたことが沙夜の心を追い詰める。

「あと携帯もお母さんが預かるわ。いいわね？ 出しなさい」

母親は沙夜の方へ手を差し出した。

反射的に沙夜は携帯の入っている鞆を握り締めた。

「沙夜！」

出し渋る沙夜に有無を言わせない母親。

会っても話しもできない沙夜にとっての唯一の連絡手段の携帯電話。
話。

それを取り上げられることは、沙夜にとって大きな痛手だった。

しかし今ここで渡さなかったら、親の言うことを聞かなかったら、
事態はより一層悪化してしまう。

沙夜は渋々鞆を開け、携帯を取り出した。

（今は堪えるしかないんだね。お母さん達の機嫌が直るまで我慢するしか……）

沙夜は携帯を握り締めた後、奥歯を噛み締める思いで携帯電話を

母親の手の上にのせた。

これではばらく颯と電話で話すこともメールすることもできない。連絡手段を絶たれたことで、沙夜はこの先に不安を抱いていた。

いつになったら親の怒りが解けるのか。一体いつ颯のことを認めてくれるのか。その日が本当に来るのだろうか。

もし来なかったら。

そう思うと、沙夜の胸は締めつけられた。

沙夜は母親と一言も会話することなく、母親の運転する車で学校に登校した。

教室に入ると、すでに登校していた颯が歩み寄って来た。

「おはよう、沙夜」

颯の姿を目にした沙夜の胸は、彼への想いが込み上げる。

「…………おはよ」

ずっと会っていたい。会えなくなるなんて堪えられない。

親に失望した沙夜には颯が唯一の心の支えとなっていた。

「今日は遅かったな。電車乗り遅れた？」

毎朝電車の中で会えるよう、時間も何両目かも二人で決めていた。

颯は今日ひよっとして沙夜が休みなのかとも思っていた。

しかし沙夜は首を横に振る。

「……一緒に登下校できなくなっちゃった」

沙夜は俯いた。

「両親に颯とのこと反対されて、お母さんが車で送り迎えすることになっちゃったの。携帯電話も取り上げられちゃった」

やり切れない沙夜の言葉に、颯はどうしてそうなったのか詳しいいきさつが知りたかった。

しかし反対される理由は一つしか考えられなかった。

自分の過去のせいだと。

聞こうとしたがチャイムが鳴り始めてしまった。

「次の休み時間、話しよう」

すぐにでも聞きたい衝動を押さえ颯は言った。

沙夜はただただ頷くだけだった。

一時間目の授業は二人にとっていつも以上に長く感じられた。

二人とも授業に身が入るわけもなく、ただひたすらお互いのことばかり考えていた。

やっとのことで授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、起立礼が済むと、颯は沙夜を連れて屋上へ続く階段を登りきる。

そこは昼休みや放課後以外ならほとんど人は来ない。

「沙夜、昨日何があったか話してくれ」

いつかは親に話さなければならぬと思っていた颯の過去。

彼との相談もなく、彼に一度も会うこともなく、悪い形で打ち明けなければならなくなったその原因は自分にあつたのだと、沙夜は颯に申し訳なかった。

夏休みの課題テストの結果が招いた今回の一件を、沙夜はありのまま颯に話した。

「少年院のこと、勝手に話してごめんね」

「いや、いつかは言わなきゃならなかったことだから」

沙夜の痛々しい微笑みが、彼女の受けたダメージを物語っていた。

颯はまた沙夜に辛い思いをさせてしまったことに胸を痛める。

しかしもう以前のように後ろ向きにはならなかった。

二人でどんな思いも分かちあおうと決めたのだから。

今度のことも二人でなら何とかなるはず。颯は思った。

「俺今日の帰り、お前の母さんに会うよ」

颯の意外な言葉に、沙夜は凝視し首を振る。

「ダメ。そんなことしたら私転校させられちゃう!」

動揺する沙夜の両肩を掴んだ颯は、彼女の瞳を真っ直ぐ見つめた。

「でもそれは逃げることになるんじゃないのか？ 確かに俺のことを認めてもらうには時間がかかると覚悟してる。昨日の今日で怒鳴られるのも覚悟の上だ」

「でも転校させられちゃったら、会うこともできなくなるんだよ？」

「そうならないように認めてもらうしかない。俺は後ろめたい思いなんてなく、堂々とお前と一緒にいたい」

颯の瞳が力強く光った。

(……私のしてることは逃げ。それに引き換え颯は正々堂々と戦おうとしてくれる)

颯の存在が心強く感じた。

颯が真剣に自分のことを考えてくれているのだと思えて嬉しかった。

「そうだね。私も颯と一緒にいたいもん。二人で頑張ろう」

沙夜の言葉に、颯は微笑んで頷いた。

そしてその日の放課後。

沙夜と颯は手をしっかりと握り締め校門を出た。

すぐ傍の道路脇には一台の車がすでに止まっていた。沙夜の家
車である。

二人の姿を目にした母親は、運転席から飛び出す勢いで車から降
りた。

「沙夜、あなた……」

信じられないものを見たような目つきの母親のもとへ二人は近づ
く。

颯は深く一度お辞儀した。

沙夜は緊張した面持ちで母親を見つめる。

「お母さん、私やっぱり颯と一緒にいたい。約束守れないの。」
めんなさい」

強張った顔の沙夜の手を、颯は励ますように少し力を入れて握っ
た。

「初めまして。本多颯です。話は聞きました。確かに俺にはあの過

去があります。反対されるのはごもつともです。すぐ付き合いを認めて欲しいなんて無理を承知でお願いします。どうか沙夜さんと一緒にいることをお許し下さい」

颯の潔い言葉に母親は一瞬何も言えなかったが、はっと我に返ると沙夜の空いている側の鞆を持つ方の手首を取り引っ張った。

「沙夜、帰りましょう!」

「お母さん!? やだやめて!」

沙夜は踏ん張り手を引き寄せようとする。

「待ってください!」

引き止める颯を、母親は厳しい顔で睨んだ。

「聞くような話はありません。あなたのような人と大切な娘を付き合わせるなんてできません。あなたに人に言えないような過去がある限り、絶対許さないわ!」

「お母さん、何てひどいこと言うの!? 颯に謝ってよ!」

過去の疵をえぐる言葉をぶつけた母親に、沙夜は悲鳴のように叫んだ。

どうして颯ばかりが過去のことを責められなくてはいけないのか。

未来の可能性まで潰そうとするのか。

人は一度過ちを犯したら、二度と普通の生活を許されないのか。

「過去のことを責められたら俺は何も言えません。償っていくしかできません。ただこれだけは言います。俺は半端な気持ちで沙夜さんと付き合ってるんじゃないやありません。俺のすべてをなげうっても守りたい人です。……俺はどんなことがあっても沙夜さんを諦めたりはしませんから」

迷いのない颯の言葉。

どんな非難を浴びようと、決して揺るがない強い思い。

沙夜は彼の内に秘めた決意の堅さに心を奪われた。

颯は沙夜の顔を優しく見つめた。

「今日はお母さんと帰りな。俺は絶対諦めないから。許してもらえらるまで何度でも話すよ。お前も辛いと思うけど、一緒に頑張ろうな」

颯がとても頼もしく思えた。

「うん。私も頑張るよ」

沙夜も微笑んだ。

「さ、帰りましょう」

母親が言つと、今度はそれに従い沙夜は颯の手を放した。

放す瞬間、二人はお互いに示し合わせたように握り合った手に力

を込めた。

まるで二人の思いを確かめるかのように……。

車に乗りこんだ沙夜は、名残惜しむように窓から颯の姿を見つめた。

その手は温もりを逃さないようにぎゅっと握られたいた。

(9)

その日から颯は毎日のように学校帰りに沙夜の家を訪ねた。

それは休みの日も欠かさず続いた。

しかし沙夜の両親はインターホン越しに追い帰すだけで、颯の話を何一つ聞こうとはしなかった。

それどころか沙夜の言い分すら何も聞いてはもらえない。

頭ごなしに反対され、沙夜は食事の時以外自分の部屋に閉じこもるようになっていた。

学校が沙夜にとって心のゆとりを持てる場所になっていた。

学校には颯がいる。

それだけで沙夜の張り詰めた気が休まるのだった。

もちろん学校では颯と会うだけでなく話もしている。

親との約束は破り続けていた。

沙夜は話も聞こうとしてくれない両親の言うことを守る気にはなれなかった。

何よりも颯が堂々としていたと言ってくれたことが、沙夜の心に勇気を与えた。

そんな日々が繰り返されたある日。

とうとう両親が痺れを切らした。

「沙夜、お前を広島叔母さんの家に預けることにしたよ」

沙夜は夕食を食べる手を止め、前に座る両親を凝視した。

(今……何て?)

「もちろん高校も広島の学校に行くことになる」

沙夜の頭の中に転校という文字が大きく浮かぶ。

頭がぐらついた。

「あの男のことは諦めなさい。距離を置けばきつと思いなおせるか」
「う」

淡々と話す父親の声に沙夜は唇を噛み締めた。

「……………いや」

「もう決めたことだ」

一番恐れていたことがとうとう起こってしまった。

それほどまでに両親は颯を嫌っているのか。

それほどまでに彼の過去しか考えられないのか。

(どうして今を見てくれないの!?)

沙夜の胸の内は悔しさでいっぱいだった。

「話も聞いてくれないで勝手に決めないで!」

「話をしたところで変わるものでもないだろう。少年院にいた男と一緒にいたってろくなことはない」

「少年院にいたからって全員をにくりに考えないで。颯は立ち直ろうとしてるの。二度と過ちは犯さないって決心してるの。普通の人だって隠れてあくどいことしてる人、いっぱいいるじゃない。その人たちに罪はないの?」

「見つからなければいいという人はいるだろう。でも沙夜が思っているほど世間は甘くない。この先、たとえば就職する時、それがネツクになるに違いない。そんな苦勞する相手と付き合おうなどと許す親がいるものか」

父の冷たい言葉。

沙夜はどうして自分のことを思ってくれてくれるとは思えなかった。

世間体が悪いからと思っっているようにしか聞こえなかった。

「苦勞したっていいの。颯と一緒に私は幸せなの。……お父さんもお母さんもどうして私達の氣持を分かってくれないの? 隠れ

て付き合うことだつてできたはずなのに、颯は堂々と会いに来てくれている。私のためにもそうしてくれている。あんなに私のこと思ってくれる人、他にいない」

毎日家に来てくれる颯。

その姿を部屋の窓から見つめることしか許されなかった切ない思いが湧き上がる。

重いものを背負いながら、それでも自分のことを諦めないでいてくれる思いが嬉しかった。

颯が諦めない限り、自分も決して諦めない。

彼の姿を見送るたび、沙夜はいつも心に改めてその思いを刻みつけていた。

「そんなもの、一時的な感情にすぎん。そんな不確かなもので自分の将来を駄目にするな」

「一時的なものってどうして断言できるの？ 一生ものじゃないっでどうして言えるの！？ お父さんはお母さんとずっと一緒にいたって思ったから結婚したんでしょ？ 私の想いがどうしてそれと同じじゃないって言えるの！？」

「沙夜、いいかげんにしなさい！！」

父親はテーブルに手を叩きつけて怒鳴った。

「とにかく手続きが済み次第、お前は広島へ行くんだ、いいな！」

父親の強固な態度に、沙夜はもう両親とは分かり合えないと思っ
た。

このままでは無理やり颯と離されてしまう。

(このままじゃ……。そんなの絶対いや！)

沙夜は親に背を向け駆け出した。

「沙夜、待ちなさい！」

「沙夜!？」

両親はただならぬ娘の様子に慌てて追いかける。

沙夜は今にも玄関から飛び出そうとしていた。

「どこ行く気だ!」

父親が沙夜の手を掴み引き止める。

沙夜は強い力で掴んでいる父親の手を振りほどこうと必死で暴れ
る。

「いや、離して。離してっつてば、お父さん!」

「沙夜!」

強く言い放つ父親を、沙夜は涙目で訴える。

「颯のとこ行く。転校させられるくらいならもう家に帰らない！」

「何馬鹿なこと言ってるんだ。そんなこと許すわけないだろう」

「行くっいたら行くの！」

夢中で手を振りほどこうとする沙夜の頬を父親は殴った。

そしてそのまま握った手を離さず、引きずるようにして沙夜を彼女の部屋に閉じ込めた。

「頭を冷やしなさい！」

冷たく閉ざされた扉。

沙夜は何もできなかつた自分の無力さと、両親に対する絶望で、溢れる涙が止まらなかった。

虚しい泣き声だけがずっと部屋に響いていた。

やがて朝を迎えていた。

「沙夜おはよう。……どうした？ 何かあったのか？」

学校へ登校した沙夜をいつものように颯が教室で出迎える。

沈んだ面持ちで俯いたままの沙夜の様子は、明らかにいつもと違っていた。

「親に何か言われたのか？」

沙夜の胸の内に父親の言葉が蘇る。

そのとたん、沙夜の俯いた顔から涙が零れ落ちた。

いち早く気づいた颯は、沙夜の頬を手で覆い、そっと上を向かせた。

「…………お前」

颯は言葉をなくした。

泣き腫らした瞳。

それはたった今泣き出したばかりとは思えなかった。

ずっと、恐らく一晩中泣いていたに違いない瞳。

颯は沙夜の痛々しい姿に、たまらず彼女を抱き寄せた。

「……………っ」

とたん、沙夜は堪えきれずに声をあげて泣きだした。

会いたかった。温もりを確かめたかった。

それをやっと得たことで、沙夜の心を覆っていた感情が一気に溢れ出したのだ。

教室中の視線が二人に集中する。

すると峻一が心配そうに寄って来た。

「どうかしたのか？」

二人に声をかけた峻一に颯は答える。

「一時間目抜けると思うけど、後は頼む」

「あ、……ああいけど」

心配そうに沙夜を見つめる峻一を残し、颯は沙夜の肩を抱いたまま校舎の裏庭へ移動した。

校舎でできた影で二人は並び座りこむ。

「……落ち着いたか？」

颯は沙夜が泣き止むのを待って声をかけた。

沙夜は小さく頷くと、自分の肩を抱く腕とは反対の颯の手をそつと握った。

そしてその手をじっと見つめ呟く。

「転校させるって。……叔母さんのいる広島に」

颯はもしかしたらと覚悟していたことを告げられた。それでもシヨックだった。

「とうとうそんなことまで言われたか……」

自分の行動がそこまで言わせるほど、沙夜の両親を追いつめてしまったのだと思った。

だが後悔したわけではない。

隠れてコソコソ付き合っていたら、それは本当に沙夜を大切にしていけないことになると思った。

沙夜に後ろめたい思いをさせたくはなかった。

簡単に許してもらえるなんて甘い考えはなかった。

だが向こうが切り札を出してきたことで、颯はさらに道のりが遠いことを痛感した。

「颯と離れたくない。私、颯と一緒にいられるなら家出てもいい。颯の傍にいられるなら他に何もいらぬ」

さすがのように自分の手を両手で握ってくる沙夜に、颯は沙夜の言う通り一瞬彼女をこのまま連れ去ってしまいたい衝動にかられた。

そんな自分の心を颯はグッと堪える。

「俺、必ずお前の両親説得するから」

沙夜は首を横に振った。

「だめだよ。お父さん達颯の話し聞くどころか会う気もないの。説得なんて無理だよ」

「でもこのままじゃ離れ離れにされちまうだろ」

「もうあんまり時間もないの。手続きが済んだら広島へ行かされちやうの」

唇を噛み締め、潤んだ瞳で沙夜は颯を見つめた。

「離れたくない。お願い、私を離さないで……」

沙夜の言葉に答えるかのように、颯は彼女を抱き締めた。

離したくない。

でも認めてもらう術が今はない。

いつ会ってくれるか分からない沙夜の親を待っているうちに、沙夜は広島へ行かされてしまう。

(どうすればいい?)

自分にできること。それは何か。

万事上手く治められるような方法などありはしない。

(俺は沙夜のたった一つの願いも叶えてやれないのか?)

改めて自分の背負った過去の重さを実感した。

普通の高校生の付き合いだったらここまで反対はされなかったのにと。

颯はふと以前、沙夜が自分に言ったことを思い出した。

「沙夜、明日遊園地行くの？」

「……颯？」

「あの時できなかったデートしよう」

今はせめてしてやれることなら何でも叶えてやりたかった。

「でも明日平日だよ？」

「一日くらいかまわないさ。今はできる限り一緒にしよう」

今は……と言った颯の言葉を沙夜も分かっていた。

自分達に残された時間は少ないと。

親たちの力の前では、自分達子供の思いなど歯が立たないのかもしれない。

(颯は私を連れ去ってはくれない)

沙夜は思った。

でもそれは自分のことを思ってくれているからこそであって、颯

の自分に対する想いの深さを疑うものではなかった。

大切に想ってくれているから無茶なことはしない颯。

家族の愛に飢えて育った颯には、愛情をいっぱいを受け真っ直ぐに育った沙夜を家族から引き離すことができなかった。

どんなに自分のことを反対されても、沙夜をこのように育てたのはまぎれもなく両親なのだから。

沙夜にだけは自分の味わってきた思いをさせたくはなかったのだ。

「でも認めてもらうのを諦めたわけじゃないから。いつかきつと思いは叶うから」

颯のゆるがない決心が、沙夜に微笑みを与えた。

「私、颯に出逢えてほんとによかった」

彼に出逢わなかったら、ごく普通の男の子と恋愛していたかもしれない。

時には悩むこともあったかもしれない。

けれどもここまで悩み苦しんで涙するような思いはしなかっただろう。

でもだからこそ人を愛することの大切さを実感できた。

その思いは沙夜にとって宝物のように輝いていた。

「それは俺のセリフだよ」

颯も同じ思いだった。

「じゃ、明日朝駅で待ってる」

「うん。親に見つかるで行かせてくれないから、何とか抜け出してみろね」

「大丈夫か？」

「颯、言ってくれたでしょ？ 今は一緒にいたいって」

「そう……だな」

親に言うのが筋なのだろう。

しかし今の状況で許してもらえないはずはない。

ただ一緒に時間を過ごしたい。

その思いがすべてだった。

「明日一日だけは誰にも邪魔されず、二人だけで過ごそう」

*

*

*

朝六時。

沙夜は両親に気づかれぬように静かに準備し、家を出て駅へ向かった。

『今日一日だけは自由にさせて下さい』

書き置きを残して。

駅に着くと、そこには始発に乗ってきた颯がすでに待っていた。

「ごめんね。だいぶ待った？」

「いや。それより家の方大丈夫か？」

「うん。メモ残してきた」

「そっか。じゃあ行こうか」

そつと差し出された手を、沙夜は嬉しそうに握った。

二人は一度県の中心駅へ出ると、路線を変え、特急電車で隣の県にある割と大きな遊園地へ向かった。

地元から遠く離れた遊園地にしたのは、誰にも見つからず、二人の時間を充実させたかったからだ。

遊園地のある駅に着くと、その近くで遅めの朝食を取ろうと喫茶店へ入った。

「いらっしゃいませ」

マスターから声がかかった。

二人は空いている席に座る。

「何にする？」

颯はメニューを手に取り沙夜にみせる。

「えっと、……紅茶とトースト」

その時ウエイトレスが水とおしほりを持ってきた。

（ご夫婦でやってるお店なのかな？）

女性を見てふと思った。

「ご注文お決まりですか？」

その声に、メニューを見ていた颯が反射的に顔を上げた。

颯の表情は堅く凍りついていた。

目を見開いて、ただじつとウエイトレスを見るばかり。

「……颯、どうしたの？」

沙夜の声にも答えられないくらい颯は動揺していた。

見ればウエイトレスの方も信じられないといった顔つきで颯を見ている。

「ま、まさか。……………名前は何ておっしゃるの。」

ウエイトレスの声は震えていた。

颯は何も答えない。いや答えられなかったのだ。

二人を見比べていた沙夜が、颯に代わって口を開く。

「あの……………彼は本多颯という名前ですが、……………お知り合いなんですか？」

「本……………多」

かき消されそうな声でウエイトレスは呟いたかと思うと、彼女は注文も聞かずに突然足早に店の奥の扉へ引っ込んでしまった。その奥は自宅へと繋がっている。

何が起こったのかわからない沙夜は、ただ茫然と二人を見比べるように扉と颯と交互に視線を移す。

（昔の知り合い？）

ただの知り合いだったら二人ともこんな動揺はしないはず。

「颯。……………颯ってば。あの人誰なの？」

沙夜に何度も名前を呼ばれ、颯はやっと我に返った。

気を落ち着かせようとコップの水を一気に飲み干すと、フーッと

一息吐く。

(颯をこんなにも動揺させる人って誰?)

思いつかず颯の返事を待つ。

颯は視線を沙夜へ向けた。

「あの人は俺の……………母さんだ」

沙夜は颯の告白に目を丸くした。

「母さんって、あの颯を残して家出てっちゃった……………」

信じられないように沙夜は言った。

「そうだ」

突然消えた母親に、家とは遠く離れた場所で、こんな偶然の再会が起こるとは誰が想像できただろう。

しかし二人は再会したのだ。

(これは神様のお導きなの……………?)

ふと颯が席を立った。

「店、変えよう」

「ちょ、ちょっと待って!」

沙夜も慌てて立ちあがり、颯を引き止める。

「このままでいいの？ 会わないの!？」

「会ってどうするんだ？ 母さんには今の生活がある。俺も自分のこと、本多の家のこと何も言いたくない」

とつてい人に自慢して言えない自分の置かれた立場。

自分を忘れたわけではない母親にそれを告げれば、母親は苦悩するだろう。

それは彼女の今のこの生活をも脅かすかもしれないのだ。

「でも会わないと、颯きつと後悔するよ。言いたいこと言わなきゃ。颯は言っつていいんだよ。ずっと一人で胸の内に抱えてきたんだもん。颯には言う権利あるんだよ！」

沙夜は突然後ろから軽く肩をポンツと叩かれ驚いて振り返った。

そこにはマスターが立っていた。

「君達、奥の部屋に来るといい」

マスターは神妙な顔をして言うと颯を見た。

「君が颯くんか。綾子の子の……。初めまして。夫の高田敏文とい
います。……さ、部屋に案内するから来なさい」

「でも俺……」

「このお嬢さんの言う通りだよ。今話し合った方がいい。君も言いたいことあるだろう」

沙夜は戸惑う颯の手を引っ張った。

「行こっ」

じつと沙夜の目を見つめる颯。

それは迷いを含んでいた。

沙夜は颯の心細そうな様子に、彼の手を握る手に力をこめる。

「私も一緒にいるから」

颯の力になりたい。守れる、支えられる存在になりたい。

どんなことも一緒に分かち合っていきたい。

そんな沙夜の思いは颯に伝わってきていた。

「母さんに会っよ」

二人は手を堅く繋いだまま、マスターに母親のいる所へ案内された。

母親は泣いていた。

颯を見たたん、母親はいきなり土下座した。

「ごめんなさい。颯、ごめんなさい！」

母親は何度も何度も謝り続けた。

颯はそっと沙夜の手を離し母親に近づくと、その脇に膝をつき彼女の二の腕を掴んだ。

「母さんもういいよ。……母さんも辛かったんだろ？」

颯は母親に語りかけた。

颯に手を引かれ、母親はそろそろと身を起こす。

「ごめんなさい」

「もういいって。……恨まなかったって言ったら嘘になるけど、今はちゃんと母さんが幸せならそれでいいって思えるから。もし母さんに会ったら俺はどんな恨みをぶつけるだろうって思ってたけど、こうして本当に再会してみて、驚いたけど憎む思いはなかったよ」

小さい頃、確かに自分を捨てた母親を憎み恨んだ自分がいた。

どうして自分を捨てたのか問い詰めてやりたかった。

しかし今颯の思い出す母親は、頼りなくいつも心細そうに淋しそうに家にいた、そんな姿だった。

この人も本多の義父との間で色々苦しみ、堪えられなかったのだ

ろっ。

颯は憐れみこそすれ、憎しみを抱くことはなかった。

「本当はあなたを連れていきたかった。けれど本多は絶対にそれだけは許さなかったの。……本多は病気がもとで子供の作れない体だったの。だから後継ぎとしてあなたを手放さなかったのよ。……いつもあなたのことを思っていたわ。本多が愛情持って子供を育てるとは思えなかった。そんなところにあなたを残してきてずっと後悔してきたの。母さん、どうしたらあなたに償えるの？」

今初めて知る母親の心。

決して望んで自分を捨てたのではない。

それが分かって、颯は母親の愛情を感じた。

「償って欲しいなんて思っていない。俺のこと覚えてくれてただけで充分だ」

颯は母親を立ち上がらせると、沙夜のもとへ来て肩を抱いた。

「俺、今幸せだから安心して。母さんも今の生活大切にしなよ」

颯は母親に向かって微笑んだ。

母親は颯の優しい心を知り、少し救われた気がした。

「それじゃあ俺達行くから。母さんも元気で」

母親は何も言葉にならず、ただただ何度も頷いていた。

それから二人はマスターに用意されていたサンドウィッチとコーヒーを頂き、その店を後にした。

「沙夜、ありがとな」

「えっ？」

沙夜は突然礼を言った颯を見上げた。

颯は沙夜の頭を撫でて微笑む。

「お前がいなかったら母さんと話できなかった。あのままだったらきっとお互い苦しんでたと思うよ」

母親の泣き崩れる様を目の当たりにして、颯は初めて母親の抱えている心の疵を知った。

もしあのまま会わずに別れていたら。

母親の疵をえぐり返し、さらに深く傷つけていたのではなからうか。

「また会いに来ようね。やっと会えたんだもん。颯の成長する姿、見せに……さ」

今はまだぎこちない会話しかできなくても、何度か会えばもっと打ち解け合えるはず。

本当の親子なのだから。

颯にとってはたった一人の血を分けた肉親なのだから。

「そうだな。いつか……」

颯は言いながらチラッと沙夜を見た。

いつか沙夜の両親に認めてもらい、二人の将来を誓い合った時にはきっと。

颯は心の中でそう思った。

沙夜は颯の腕に自分の腕を絡めた。

「えへへっ」

颯と目が合い思わず照れる沙夜を、颯は愛しそうに見つめ、遊園地へと歩み出した。

*

*

*

一日はあっという間に過ぎていく。

夕方も終わりに近づき、辺りは闇に包まれ出していた。

「もうそろそろ帰らないと……な」

「……うん。最後に観覧車に乗りたいな」

沙夜は引き止めるように颯の手を握った。

(もっと一緒にいたい)

颯と二人だけの時間なんて、この先いつ訪れるか分からない。

いくら時間があっても今はぜんぜん足りない気がした。

二人は沙夜の希望通り、観覧車に乗りこんだ。

二人は寄り添い、手を取り合っていた。

もっと、もっと進むのが遅くなって欲しい。

このまま時間が止まって欲しい。

ゴンドラは静かな音をたてて、二人の思いとは裏腹に進んでいってしまっ

見下ろす夜景が、切ない思いを増長していた。

好きな人と観覧車に乗るのが沙夜の夢だった。

その夢が叶ったはずなのに、胸に迫るのは切ない悲しみ。

「……………帰りたくないよ」

ポツリと沙夜は呟いた。

そのとたん、涙が二人の重ねた手の上に落ちた。

「……沙夜」

ギュツと沙夜を抱く手に力がこもる。

「帰りたくない。もっと颯と一緒にいたい」

颯は流れる涙を拭うように、頬にそつと唇で触れた。

そしてそのまま沙夜の唇に口付けした。

長い間それは続いた。

沙夜は頭の奥が痺れるような感覚がしていた。

颯の熱い想いが直接伝わってくる、そんな感じだった。

唇が離れたのはもう少しで地上に着くというところだった。

「沙夜、俺も今日お前を帰したくない」

颯の熱い想いを言葉を受けた沙夜は、即座に颯の首に抱きついた。

「帰さないで！」

颯は答えるように沙夜の背に手を回し抱き締めた。

帰らなければ沙夜の親の怒りを買うのが分かってはいた。

認めてもらうのがさらに遠くなるのも承知していた。

それでも二人は帰ることができなかった。

ただ一緒にいたい。

それがすべてだった。

二人は遊園地を出ると、その県を中心地へ出て夕食を済ませ、一軒のシティーホテルに入った。

平日ということもあって空室も何部屋があった。

「ここけっこう高そうだよ。私あまり持ち合わせないけど大丈夫？私のことだったら泊まれればこんな綺麗なところじゃなくてもどこでもいいよ」

沙夜は後ろからそっと颯の袖を引っ張り耳打ちした。

颯は沙夜の耳にそっと話しかける。

「お金の心配はいらないよ。俺クレジットカード持ってきてるから」

颯は手続きを済ませた後、客室に移動する間に詳しく教えた。

「義父さんが俺の小遣い用の口座とカード作ったんだ。まあ義父さんは俺が悪さしないように多めに金を与えておけばいいだろうって考えだけだな。そんな金大っぴらに使うのもしかただからいつも必要最小限に抑えてたけど、今日は緊急事態だから使わせてもらうことにした」

(颯は笑って言ったけど、あのお義父さんを頼ったみたいで嫌だろ
うなあ)

「後で私の分払うよ」

「いって。こんな時くらい俺に払わせろって」

颯の強固な様子に、沙夜は何を言っても自分のお金を受け取らないだろうなと思い彼に甘えることにした。

「ありがとう。今度は私がおごるね」

そんな会話をしていると、いつの間にか部屋に着いていた。

中に入ると大きなダブルベッドが目に入る。

とたんに沙夜は意識してしまった。今夜ここで自分の身に起こるだろうことを。

全身が熱く火照って、脈拍も異常に速く打っている。

(私、颯と結ばれるんだ)

颯とならいいと思った。颯意外には考えられなかった。

けれどどうしても緊張してしまう。

颯はベッドに腰を下ろした。

「沙夜、一度家に連絡入れた方がいいんじゃないか？ 帰ってこな

いからきつと心配してる。掛けにくかったら俺が電話しようか?」

予想外の颯の言葉に、沙夜は戸惑った。

「……今は親のこと考えたくない」

沙夜は現実を忘れたかった。

きつと明日は颯が待っているのだから、今はただ夢のようなこの空間を壊したくなかったのだ。

颯は沙夜の手を引き自分の足の間に座らせると、背後から彼女を包み込んだ。

「今夜は帰らないってことだけでも言つといた方がいい。事故にあつたんじゃとか思ってるかもしれないし」

自分と一緒にいることはとうに知っているだろう。

それならば何かに巻き込まれたんじゃないかとヤキモキさせるより、はつきりさせてしまった方がいいのではないかと颯は思った。

「颯がそこまで言つなら……」

沙夜はベッドの脇にある電話の受話器を取り、恐る恐る自宅のナンバーを押す。

親の反応は心得ていた。

沙夜の思ったとおり、コール一回目で繋がった。

「……もしもし」

「沙夜なのね。今どこにいるの？ 早く帰ってらっしゃい！」

母親の声だった。

明らかに苛立ちと怒りを含んだ声である。

予想していたとはいえ、沙夜の心はシュンとなった。

「お母さん、明日は必ず帰るから……」

「明日って。今すぐ帰ってきて……」

沙夜は母親の言葉を遮るように受話器を置いて颯を振り返った。

「……いいの？」

母親の声は颯にまで届いていた。

一言だけ言って電話を切ってしまった沙夜への、明日家で起こることが心配になった。

「いいの。今は颯のことだけ考えていたいの」

覚悟を決めて家との連絡を絶った沙夜のその決意を感じ、颯は再び後ろから抱き締めた。

「……沙夜」

耳元で愛しそうに囁く颯の声に、沙夜はその身を預ける。

(今はただ颯の温もりを感じていたい)

たとえそれで親の怒りを買うことになったとしても。

沙夜は自分を抱き締める颯の腕を愛しそうに掴んだ。

颯はすべてを自分に預けてきた沙夜のその唇をそっと塞ぐ。

触れるたびに心の奥が熱くなっていく。

頬に頬にそして唇に、繰り返される口付けに、いつの間にか二人はベッドに横になっていた。

颯は沙夜の額にキスした。

「沙夜、今日はこのまま寝よう」

「……えっ？」

颯の言った意味が一瞬分からず、沙夜はきよとした瞳で颯を見つめた。

颯は微笑んで沙夜の髪をかきあげる。

「私に気を遣ってるの？」

不安げに呟いた沙夜の言葉に、颯は小さく首を横に振る。

「違う。……俺も男だ。愛した女を抱きたいって欲はあるよ」

「じゃあどうして？ 私、颯とならいいよ？」

「……俺、沙夜のこと大切にしたいんだ。沙夜自身も、沙夜を取り巻くものも、すべてを大切にしたい。沙夜には一番幸せになって欲しい。だから俺、何度も何度もお前の親に会いに行くよ。どんなに時間がかかっても必ず俺達のこと認めてもらう。それまで沙夜を俺のものにするのは我慢する」

沙夜は颯の自分を包み込む大きな愛を感じた。

沙夜自身も、沙夜の周りのものもすべて。それには両親もちろん入っている。

両親はあんな男と颯をさげすんでいるのに、それでも沙夜の幸せを思っ、今も自分の欲を押さえひたすら沙夜のことを一番に思っている。

沙夜は体を重ねる以上に、颯の心に触れた気がした。

「……………ただ」

颯が再び口を開く。

「ただ？」

颯が微笑みを消し、じっと沙夜の顔を真剣に見つめた。

「もし万が一、沙夜が成人してお互い社会人になった時でも全然認められなかったら、その時は……お前をさらつてもいいか？」

それはやるべきことをすべてやっても全くダメだった時の最終手段。

今の状況からだとなながち万が一とも言えなくもない。

（私と颯が駆け落ちする）

お互い自分のすべてを捨てる。しかし一番望んだ人が傍にいてくれる。

（颯がいてくれるなら、他に何も望まない）

沙夜は返事の代わりにそっと颯にキスをした。

颯も沙夜の思いを知り目を細める。

「遠く離れても必ず会いに行くよ。バイトしてお金貯めて会いに行くから、待っていて欲しい」

真摯な颯の言葉に、沙夜は頷いた。

待っていられる。どんなに時間がかかろうと、今のこの颯の言葉が胸に刻まれている限り、ずっと待っていられる。淋しくても堪えられる。

そう実感できたから。

二人はその夜、傍らに互いの温もりを感じながら、幸福のひとときを過ごしたのだった。

辺りが夕焼けに染まり始めた頃、二人は帰ってきた。

沙夜が自分の家のドアを開けたとたん、両親がそろって飛び出してきた。

沙夜は父親までもいたことに驚いた。

(お父さん、会社休んだの?)

「お父さん、お母……」

沙夜が口を開きかけたとたん、父親はいきなり沙夜の隣に立つ颯を拳で殴りつけた。

軋むような音が沙夜の耳にも届く。

颯は避けもせず、父親の怒りを受け止めたのだった。

「きさまがうちの娘をたぶらかしたのか!!」

「お父さんやめて! 颯は悪くないの!!」

二人の間に割って入った沙夜を、父親は今度は平手打ちする。

「高校生が男と外泊するなんてまだ早い!」

沙夜を叱り始めた父親に、颯が立ち塞がる。

「沙夜を叱らないで下さい。連れ出したのは俺なんですから！」

「違う、二人で決めたの。二人で過ごしたかったの。離れたくなかったの！」

自分を庇った颯の腕にしがみつき、沙夜は父親に言い放った。

「……………沙夜、お前」

二人で決めたこと。

二人で乗り越えようと誓ったこと。

沙夜のその思いを知り、颯は逆の手で沙夜の自分にしがみつく手を握った。

交わる視線に、互いの思いが交錯する。

二人ですべてのことを分かち合っている。

その思いに二人は無言で頷いた。

「とにかくもう帰ってくれ。二度と来るな！」

父親は沙夜を颯から引き剥がすようにして腕を引っ張った。

「お前も家に入ってなさい！」

未練を湛えた瞳で自分を見つめてくる沙夜に、颯は握っていたそ

の手に一瞬力をこめ、そつと離れた。

颯のしつかりと前を見据えた瞳に、沙夜は力を分けてもらった気がした。

「また、学校でな」

「うん」

沙夜は母親と共に颯を残し家の中に入った。

ドアが閉まると、父親は威厳を湛えた目で颯を見据える。

「もう娘に会わないでくれ。うちにも来るな、いいな!？」

颯は背筋をピンと伸ばす。

「沙夜さんとの付き合いを認めてもらえるまで何度でも通います」

「認めることはない」

「どんなに時間がかかっても俺達のこと分かってももらえるまでは諦めません。沙夜さんと約束したんで

す。二人でどんなことも乗り越えていこうって」

父親は目の前の男と、そして娘の固い決意を突き付けられた気がした。

二人を諦めさせるにはどうすればいいのか。その答えがわからず父親は、

「とにかく帰ってくれ」

というのが精一杯だった。

颯は昨日の今日で何を言っても父親の怒りを買っただけだと思っ
た。

「……今日はこのまま帰ります。でもまた来ますから」

颯は深々と一礼すると、沙夜の家を背を向け歩き出した。

父親は家の中に戻ると、沙夜をリビングに呼んだ。

「沙夜、もうあの男に会うな、いいな！」

これまで以上に父親が怒っているのを沙夜は感じていた。

けれど「はいそうですか」と受け入れることなど到底できなかつ
た。

二人一緒にいられるために、今ここで逃げ出すことはできない。

颯も父親と向き合ってくれた。自分も父親ときちんと話をしなけ
れば、前に一步も進めない気がしたのだ。

「お父さん達がどんなに反対しても颯とは別れない。たとえ転校さ
せられたって、私達の想いは変わらない」

「あんな男のどこがいいんだ。まだ高校一年の娘を連れ出して外泊

するなんてとんでもない男だ」

「あんな男って、それは颯が少年院にいたってことを言ってるの？
それとも外泊したことを言ってるの？」

「両方だ」

少年院イコール性質の悪い不良。

それが沙夜の両親の頭にインプットされているイメージ。

そんなイメージがあるから、何をしても「あいつは……」みたいな蔑んだようにしか相手を見ることができないのだと沙夜は思う。

「お父さん、お母さん、私もつと颯のこと知って欲しい。上辺だけじゃなくて、人間的なこととかどうして少年院に入ることになってしまったのか全部知って欲しいの。だから私の話、聞いて」

沙夜の嘆願に、両親は仕方ないかといった表情だった。

聞くだけ聞いてやる。そんな両親を前にして沙夜は語り出した。

颯に過去何があったのか。

両親のことに始まり、不良グループにいた時のこと、兄と慕った人の殺人の濡れ衣を着せられ人間不信になったこと。少年院に入り、保護司の中川さんと出逢い、愛情を知ったこと。高校受験を決めたこと。そして自分との出逢い。

その中で生まれた愛するがゆえの苦悩。一度は過去のせいで別れ

を選んだこと。そのために新たに生まれた苦しみ。

そして二人でどんな思いも分かちあおうと誓ったこと。

「颯は自分の過去とずっと戦っているの。『一度道を踏み外した者は、二度と元には戻れない』。そんなことを言われてもずっと堪えて頑張ってる。とても内面の強い人なの」

沙夜は昨日の颯の大きく包み込んでくれた深い愛を思い出した。

「昨日も私、颯とならどうなってもいいって思った。でも颯は私を抱かなかつたの。私達まだ一線越えてないんだよ」

「そんなはずは……」

沙夜の言葉に信じられないといったように父親が呟いた。

いかにも遊びなれていそうな男が、何もせず一晩女と過ごすはずはない。特に娘のような、その手のことには無知の女の子を騙すことなど容易かつただらうと考えていたのだ。

「颯はね、私のことすごく大切にしてくれてるの。私自身も私の周りもすべて大切に思ってくれてる。だからお父さん達が認めてくれるまで、私を抱くことはできないって言ったんだよ。私それ聞いた時、すごく愛されてるんだって感じた。高校生にもなれば関係を持つのが普通のご時世なのに、そこまで考えてくれる人なんて高校生じゃなかないと思う。私、颯ほど誠実な人いないって思ってる」

そう言った沙夜の表情を見て、両親は内心驚いた。

いかにもまだ子供だと思っていた娘が、大人の女性の表情を垣間見せたからだ。

手のかかる子供が親離れた瞬間とでもいうべきか。

いつの間にか成長した娘を見て、淋しさがふと横切った。

「お前の言い分は分かった。……後で峻一さんと萌子ちゃんに連絡しておきなさい。二人ともお前のことずいぶん心配していたんだからな」

父親に言われ、沙夜の頭に二人の自分を心配する顔が浮かんだ。

「……うん」

二人には今回何も言わずだったから心配かけただろう。

(昨日、うちの親が何か知ってるかって連絡したのかもしれない)

突然二人で消えたのだから充分ありえることだった。

沙夜は椅子から立ち上がり、自分の部屋へ戻った。

そして部屋の子機から二人に電話を入れたのだった。

*

*

*

次の日。

学校に行くと何だかいつもと様子の違うことに沙夜は気づいた。

(何かジロジロ見られてる気がする)

自分を見る視線がやけに気になる。

クラスの中でも割りと話したことがある女子が近寄ってきた。

「和泉さん、本多くんが少年院にいたってホント？ で、親に反対されて駆け落ちして連れ戻されたって皆言ってるんだけど……」

聞きすらそうに、だが噂が本当なのか確かめてみよう、そんな興味津々な感じだった。

沙夜は何て言ったらいいのか分からなかった。

颯の過去が知れ渡っている。それだけでもショックだった。

事実なのだから認めてしまえばいいのだが、噂が真実だと分かった時の、皆の反応が分かっているからこそ怖かった。

しかも二人して学校を休んだことが、駆け落ちという噂にまで発展してしまっている。

(どうしよう。……どこまで話していいの?)

どこまで皆、自分達の思いを分かってくれるのだろうか。

沙夜が何も言えずに俯いていると、今度は男子生徒が近づいてきた。

「和泉つて見かけによらず大胆なんだな。実はそつちの経験豊富だとか？」

皮肉的な笑みで言った男子生徒を、沙夜は眉をひそめて見た。

「本多も女に不自由してなさそうだよな。なんたって少年院にいたくらいなんだ。遊び慣れてるんだらうなあ」

「……………どうしてそんなこと言うの？」

自分達のことを何も知らないのに、そんなことを言われて悲しかった。

興味本意で茶化されるのが辛かった。

何よりあの日の約束が汚された気がした。

「駆け落ちしようとしたんじゃない。ただ一緒にいたかった。それだけなのに……………」

「それで一緒にいてどうだった？ やっぱり上手かったか？」

真剣に聞こうとしない男子生徒に、沙夜はもう何も言えなかった。

自分達のことを話題にして楽しんでいる様に苛立ちを感じた。

何を言っても無駄。

この人達にとっては束の間の退屈凌ぎでしかないのだ。

「ねえ否定しないってことは本多くんが少年院にいたって噂、本当なの!？」

クラスの女子が再び聞いてきた。

見ればクラスの人達が、遠く近くに沙夜を取り囲んでいた。

(この人達に事実を言ったところで、また茶化されるだけ)

虚しさが胸に広がる。

「おはよっ」

明るい声に、一斉に教室にいた生徒が反応する。

「えっ……何？」

峻一が登校してきたのだ。

いつもと違うクラスの様子を中心に沙夜がいるのを見て、彼の頭に学校に広がる二人の噂が浮かんた。

「沙夜、皆に何か言われたのか？」

峻一が近づいてくる。

だが沙夜はクラスの人達から逃れたくて、教室から飛び出した。

「沙夜!？」

振り返りもせず走り去ってしまった沙夜を追いかけそこなった峻一は、クラス中を見渡した。

「お前ら、沙夜に何言っただよ！」

その怒りの声に、教室中が静まり返る。

最初に沙夜に聞いてきた女子が、おずおずと峻一に事と次第を話した。

「そんなこと言ったのかよ！」

峻一は原因の男子生徒に詰め寄る。

その時、颯が教室に入ってきた。

峻一は男子生徒を責めるのを中断し、颯に駆け寄った。

「本多、沙夜を捜してくれ！」

「沙夜がどうかしたのか!？」

切羽詰まった峻一の言葉に、颯は声を低くして答えた。

「お前が少年院にいたこととか、二人が駆け落ちしたとか噂になってたんだ。それを興味本意に茶化して下世話な言葉であいつを傷つけたんだよ。あいつ、教室飛び出してっただ」

噂の標的にされ傷つけられたと知り、颯の胸に熱い怒りが湧き上

がった。

(もう少し早く俺が学校に来ていれば)

颯は拳を握り締める。

(一人で心細かっただろうに)

沙夜の心を思うと、颯は自分にも腹を立てずにはいらなかった。

どんなことから守りたりと思っていた。

それなのにまた傷つけてしまった。それも自分のことのせいで。

「……俺のことは何と言われたって構わない。少年院にいたつても本当のことだ。だけど沙夜を傷つけるのだけは許さない。俺のせいであいつを傷つけるのはやめてくれ!!」

颯は叫ぶと、鞆を放り出し教室を出て行った。

颯の声に皆言葉を失っていた。

今まで聞いたことのない颯の迫力のある大声。

感情をこれほどまでに露にしたのは、クラスメートの前では初めてのことだった。

「皆、もうあいつらのことそっとしておいてやってくれないか?」

峻一が静寂を遮った。

「本多の過去のこと、本多も沙夜も悩んで、それでも一緒にいることを選んだんだ。俺、近くであいつらを見ていて思ったんだ。あんなにお互いがお互いのことを思っている二人を見たことがない。あんなに純粹に一途に相手のことを思っているヤツ、俺は他に知らない。……この中で誰がいるか？ 自分のすべてを捨ててまで一緒にいたいってほど人を愛したことがあるヤツ」

峻一の言葉に、峻一と目が合う人合う人、すべてが俯くように目を逸らした。

誰もいなかったのだ。自分の何もかも捨てるほど人を愛したことがある者が。

「俺は一人でもあいつらを祝福するよ。あいつらの力になってやりたいって思う。俺はあいつらと友達になれたこと誇りに思うよ」

峻一の言葉に反論する者はいなかった。

クラスメートは思った。

誰かを二人のように愛してみたい。愛されてみたい……と。

二人をひがむ思いがあったのかもしれないと反省する者もいた。

噂に踊らされていたのは自分たちの方かもしれないと思った者もいた。

クラスの空気が変わり始めていた。

*

*

*

沙夜は屋上で手すりにもたれ、景色を眺めていた。

屋上の扉を開ける重い音が、沙夜の耳に届く。

今は人に会いたくない。

そう思っていた沙夜は、その場に思わず固まってしまった。

「沙夜？」

聞き覚えのある優しい響き。

沙夜の緊張が解けた。

「颯、ここだよ」

ドアから顔を覗かせ辺りを見渡す颯に、沙夜は声をかけた。

颯は沙夜の居場所を知ると駆け寄った。

「ごめんな。お前一人辛い目に遭わせてしまって……」

沙夜は苦笑いで首を横に振ると、颯の肩にそっと寄り添った。

「……………颯」

名を呼ぶ沙夜の肩を、颯はそっと抱いた。

沙夜は傍らの温もりを愛しく思いながら口を開く。

「私、今本当に颯の気持ち分かった気がする。話を聞いてもくれない虚しさとか、言っても無駄だって人を信じられなくなるような思い。颯はずっとこんな気持ち味わってきたんだね」

淋しそうに語った沙夜の気持ちを察して、颯は両腕でしっかりと抱き締めた。

「俺といることでお前にまでこんな思いさせて……。この先もつとお前を苦しめるんじゃないかって思うと、本当は俺なんかがお前の傍にいない方がいいのは分かってる。だけど俺はもうお前を手放せないんだ。お前の気持ちが俺から離れない限り、俺、お前とは別れない。ごめんな、沙夜」

言葉通りに強く沙夜を抱き締める颯。

沙夜は颯の瞳を見つめた。

颯が今まで経験した思い。

それを体験することで本当に知ったことは、沙夜にとってはよい経験だった。

しかしもたらされた思いは少なからず彼女の心に傷を残した。

だからこそ願う。

いつも颯が傍にいてくれることを。

彼がいてくれるのなら、どんな言葉を浴びせられようと堪えられると思った。

沙夜は切なく微笑んだ。

「私を離さないで、颯」

*

*

*

颯と沙夜が遊園地へ行く前の、親の監視下に置かれた生活に戻り一週間で過ぎようとしていた。

この一週間で、沙夜達の学校での生活は徐々に変化していた。

あの沙夜がクラスから飛び出していった日の峻一と颯の言葉で、クラスの二人を見る視線が変わったのだ。

以前は二人にはあまり関わりたくない、遠巻きに眺めていたクラスメート達。

彼らが自分達から颯や沙夜に声をかけるようになってきていた。

クラスメート達にもようやく分かり始めたのだ。

颯が昔少年院に送られるようなことを起こしたことは確かなことだが、颯がその過去を背負いながらも立ち直ろう、己の足でしっかり人生を歩んでいこうとしているのを。

そんな彼を傍で懸命に支えようとしている沙夜の純粋な想いを。

そしてそんな彼女を懸命に守ろうとしている颯の深い愛情を。

クラスメート達は思った。

颯の何を怖がっていたのか。

なぜ二人に関わりたくない、必要以上に近寄らなかつたのか。

事実を確かめようともせず見た目の印象だけで判断していた、その間違いに気づいたのだ。

反省したクラスメート達は、少しずつ沙夜達に話しかけるようになった。

今では高校生になって初めて、沙夜にも名字ではなく名前で呼び合える友達ができるまでになっていた。

颯も、峻一とは親友と互いに感じるほどに友情が深まっている。

それ以外の人とでも普通に話し合えるようになっていた。

二人は高校生活を、入学して初めて満ち足りた穏かな思いで送っていた。

だが沙夜の家族に関しては相変わらずであった。

再び颯は毎日、沙夜の両親に会いに家まで通っている。

両親はあの日以来一度として颯に会っていない。いつも玄関先のインターホン越しに追い帰すだけである。

そんな中でも二人の絆は強かった。

家の外と中と隔てていても、思いはあのデートの日以前よりも通じていた。

諦める気も、悲観する思いもなかった。

いつかきつと分かってくれる。その日が来ることを信じていた。

再び日曜日が訪れた。

「……はい」

インターホンの音に母親が応答した。

「本多です」

「何度来ても会うつつもりはありません」

「お願いします。会って下さい」

懸命に訴える颯の声を、沙夜は近くで祈るような思いで聞いていた。

その時休日で家にいた父親が、母親をどけるようにして代わった。

「お父さん？」

突然現れたいつもと違う様子の父親に、沙夜は不安になった。

父親が強い口調で颯を追い帰すのではないかと思ったからだ。

「……今、玄関を開けるから待っていていなさい」

沙夜は父の言葉に目を見開いた。

「お父さん、颯に会ってくれるの？」

父親が歩み寄ってくれたことに、沙夜は状況が少し前進した気がした。

「話を聞いただけだ。許したわけじゃない」

淡々と父親は言ったが、それでも沙夜の心に光が灯った。

少しずつでもいい。両親が自分達のことを見てくれるのなら。

「あなた、本当に会うんですか？」

突然の父親の行動に母親は戸惑ったように言った。

「ああ。相手は何が何でも諦めないようだし、それならば会って話してけりをつけた方がいいだろう」

父親はあくまでも許す気はないらしい。

（お父さん、どうして颯と会う気になったの？ 早く諦めさせるためにだけ……なの？）

沙夜には父親の本心が分からなかった。

父親は沙夜が颯の過去を話した日から、ほとんど言っていないほど彼の話には触れなかった。

生活は何も変わらないのに、沙夜にも諦めるとも別れるとも言ったりしていない。

話をしなかっただけなのか、それともわざとその話題を避けていたのか。

それは沙夜にも分からなかった。

父親は自ら玄関へ向かい鍵を開けた。

颯は出迎えた父親に一礼して玄関に入る。

「来なさい」

「お邪魔します」

背を向けリビングに歩き出す父親の後を追いついて、颯も靴を脱ぎつつて行く。

「そこに座りなさい」

「はい」

父親に指された通り、颯はリビングのソファに座った。

沙夜もリビングに入り颯の隣に腰を下ろす。

「お父さん、私も当事者だからいてもいいでしょう?」

「好きにきなさい」

自分達のことなのに颯一人を父親に向きあわすことなど沙夜にはできなかった。

颯と父親がどんな話をするのかは分からない。けれどどんなことになるうと、きちんと自分の目でしっかりと見届けたかった。

沙夜は颯と目を合わせた。

(心配いらないから)

颯の瞳がそう訴えているのを沙夜は感じた。

(大丈夫。まだ第一歩を踏み出したばかりだもの。ここを越えなきゃ何も変わらないんだから……)

沙夜は毅然として父親のいる正面を向いた。

颯も真っ直ぐに父親を見た。

「沙夜さんとの付き合いを認めて下さい。お願いします」

颯は深々と頭を下げた。

沙夜も共に父親に願うように頭を下げる。

その時母親がお茶を運んできた。

それぞれの前に湯のみを置くと、母親は父親の隣に座った。

「君のことは詳しく娘から聞いた。昔に色々あったようだが、今はどうなんだね？ 今は義理の父親と暮らしているそうだが、上手くいってるのかね？」

「昔のことをすべてなかったことにできないのは分かってます。自分はその一生背負っていかなくてはいけないと。ただ昔の仲間とはすべて縁は切れていますし、少年院に入ってからは偶然に一度会っただけです。俺はたとえ昔の仲間は何を言われようと、過去のろくでもない自分に戻ったりはしません。絶対はないとここで誓えます」

臆せずはつきりと答える颯。

父親もまたポーカーフェイスを崩すことなく颯と向き合っていた。

「君がいくら頑張っても、君のその過去がある限り君を認めない人間もいるだろう。君には普通の人の人生より、険しい道が待ちうけているだろう。例えば就職するにしても、君は経歴だけで落とされるかもしれない。娘をそれに巻き込む覚悟……あるのか？」

日本はまだまだ学歴重視志向にある。

学歴の中に少年院が含まれば、それだけで人事の人間はその人間をどう捉えるか。

学校名だけで人間を絞る企業すらある世の中で、その経歴がどう響くか。

そして一緒にいれば、近所の人は沙夜すらその目と同じ目で見られるかもしれない。

「俺は将来、本多の家を出ようと思っていました。お聞きの通り、俺と義父の関係は恐らく好転することはないでしょう。義父は世間体と金が大事な人です。そんな人の家を、血も繋がらない俺は継ぎたくありません」

それは沙夜も初めて知ることだった。

二人の仲を認めてもらうにはどうすべきか。そのことばかり考えていて、将来の具体的なことまで話していなかったのだ。

「家を出てどうする？」

「家を出るのは大学を出てから……」とっています。義父も大学へ行くことは反対していません。奨学金を得ることができればいいのですが、それが無理でも将来義父には何らかの形で感謝をしていこうとは思っています。血の繋がらない俺を、愛情がなかったとはいえ家に置いてくれていたのですから。でなければ俺は施設の預けられ、高校にも行けなかったかもしれません。大学へは将来の自分のために行きたいんです。法学部に進んで司法試験を受けようと考えています。俺は将来、検察官か弁護士か、もしくは警察関係の仕事に就こうと思っています」

沙夜は颯がそこまで自分の将来を決めていたことを知り、驚くと

ともに尊敬した。

自分が将来何になりたいのか。何がしたいのか。

沙夜はまだ何も決めていなかったのだから。

「なぜその関係の仕事を選んだのかね？」

「俺は昔、補導された時も少年院へ送られる時も、自分の心を分かってくれるような人に出会えませんでした。それどころか話もろくに聞いてもらえませんでした。俺は俺と同じような思いをする人を一人でも助けられたら…….」と思っただけです。少なくとも話だけでも聞いてやれる。自分の罪を償っていくことを考えていた時、痛切に自分が何をしたいのか悟っただけです」

「そうか……」

父親は呟くと、お茶を一口飲んだ。

「君は娘のどこが気に入ったんだね？」

颯は沙夜を見た。

視線が合った時、沙夜の鼓動が跳ね上がった。颯の瞳が熱っぽかったのだ。

颯はもう一度父親に向き直った。

「沙夜さんは俺の過去を知る前も知った後も、変わらず俺を真っ直ぐに見てくれました。その純粹な瞳が俺を捕らえて離さなかった。

一緒にいると汚れた俺の心が清められていく気がしました。それに温かく優しい心根のある人です。自分の痛みよりもまず人の痛みを優先してあげられる心。一緒にいるだけで俺の心まで温かく穏かにしてくれる。……俺にとってとても大切なかけがえのない人なんです。どうか付き合うことを許してください」

颯は再び頭を下げた。

「お父さん、私からもお願いします。認めて下さい」

颯の誠実な思いに、沙夜も父親にお願いした。

自分達の思いはすべて話した。

それに両親はどう答えてくれるのだろうか。

父親はしばらく考え込んだかと思うと、おもむろに立ち上がった。そしてそのままリビングを出て行ってしまった。

「……………お父さん」

沙夜は小さく呟いた。

自分達の思いは通じなかったのだろうか。

落胆する沙夜の手を、颯は励ますように握った。

「必ず思いは届くよ」

「……………うん」

すると父親がリビングに戻ってきて、再びソファに腰を下ろした。

「沙夜」

父親は名前を呼ぶと、テーブルにある物を置いた。

「お父さん、これ……」

沙夜は驚くように呟いた。

テーブルに置かれたのは沙夜の携帯電話だったからだ。

父親は自室までそれを取りに戻っていたのだ。

「それは返そう。……それと転校の話はなかったことにする」

「お父さん！」

沙夜は目を丸くして嬉しそうに父親を呼び、颯と目を合わせた。

颯も微笑んだ。

父親はなおも続ける。それは二人ともまだまだ先になるだろうと思っていた言葉。

「二人のことは認めよう。ただし門限は七時だ。外泊も許さないな？」

「はい。ありがとうございます！」

颯は立ち上がって最敬礼した。

「ありがとうございます、お父さん！」

沙夜も満面の笑顔で言った。

条件付であったが、何より親が認めてくれたことが二人とも嬉しかった。

もう誰にもはばかりことなく、いたい時に一緒にいられる。

「あなた、本当にいいの？」

母親が意外な展開に戸惑い言った。

嬉しそうにお互い微笑み合っている姿を父親は見つめた。

「いい瞳をした青年だよ、彼は。沙夜を何よりも大切に思ってくれている。この先、普通の人より辛い思いをするのは二人とも覚悟の上だろう。私達に心配かけまいと親の言うがままに生きてきたあの子が、彼と出逢ったことで自分の意思を持つようになったんだ。…あの二人を見てごらん。あの子のあんな幸せそうな顔、見たことないだろう？」

「そう……ですね」

母親も納得したように頷いた。

子離れの時期が来たのかもしれない。

親から離れ自分の考えで歩き出した娘を、父親も母親も大きく包み込むように、一步離れたところから見守ろうと心の中で思っていた。

*

*

*

月日は流れ。

二人は高校の卒業式を迎えた。

颯は県内でも難関の大学の法学部へ。

沙夜は県内の私大の英文科へ。

それぞれ進学が決まっている。

「颯、みごとにボタン全部なくなっちゃったね。ネクタイまであげちゃったの?」

クスクス笑いながら沙夜は言った。

「何だか断れなくて……」

困ったように颯は言った。

颯は女子生徒に好かれるようになっていた。同級生・下級生を問わずに。

もちろん颯の過去のことには皆知っている。

だが皆今の颯を見て、好意を持ってくれたのだ。

もう誰も颯を恐れたりしない。男子も女子も。

颯も普通に声を出して笑うようになっていた。

「俺が人から好かれるようになるなんてな。みんな沙夜と、そしてこの高校のおかげだな」

二人は校門を出る時、校舎を振り返った。

この高校がすべての始まりだった。

出逢い、恋をし、悩み、別れ、そしてすべてを分かち合って生きていこうと誓ったあの日々。

「そうだね。ここが私達の生き方を変えてくれたんだね」

悩み苦しんだ分、得たものは大きかった。

「でもまたここから始めよう」

「うん。ここから始まり……だね」

二人は手を繋ぎ、高校に別れを告げ歩き出した。

【終わり】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8957i/>

ピュア～比翼の鳥～

2011年6月12日16時46分発行